
一海憂（みゆう） -

RYO103

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

―^{みゆう}海憂―

【Nコード】

N3835C

【作者名】

RYO103

【あらすじ】

恋にいまいち本気になれない高3の男の子がバイト先で知り合った年上の女性に恋をする・・・そんな感じの物語（おおげさかな？）です。

これはまだ俺が18歳の若僧だった頃の話です。

あの頃の俺は、まだ何も目的もなく、中途半端な気持ちで1日1日を送っていました……。 (文中の場所等は架空の物です)

登場人物

古坂拓斗 こさかたくと 高校3年 茶髪にピアス、そこそこイケメンの今時の高校生

今のところはフリー 恋にあまりマジになるタイプではなかった
帆苅海憂 ほかりみゆう 23歳 プロサーファーを目指している 男っぽくさっぱり つやまけい した性格の持ち主だが恋には一途なタイプ

津山 圭 つやまけい 23歳 海憂の彼氏だが3年前、海の事故で寝たきりになる なるせまなみ
成瀬愛実 拓斗の幼なじみ 拓斗の事が気になるようではあるが幼なじみで あるがゆえそれが恋なのか友達なのかはつきりしていない ない

斉藤雅弥 さいとうまさや 高木翔人 たかぎしょうと 糠信謙太 ぬかのぶけんた 拓斗の同級生

関耕作・聡美 (せきこうさく、さとみ) 拓斗がバイトをしている海の家 しおながしゅん 潮騒 しあさい のオーナー

潮永俊大学2年 しおながしゅん 前本康27歳 まえもとこうと 3歳の男の子のよきパパであり海の男 すすもとりよつへい

鈴木凉平大学2年 海の家、潮騒のバイト人 やさがみつる

八坂充 拓斗をモデルとしてスカウトしそれから拓斗がモデルの仕事をやっている やまねまこし やすいようにいろいろサポートしている

山根誠 拓斗のマネージャー 仕事に厳しい反面 拓斗の兄貴のような存在 俊敏マネージャーという噂も

「おはよー!」「おつす!!」「はよー!」

「ねえ、拓斗、今日学校ふけたら渋谷でも行かない?」愛実が言った

「渋谷?だりーなあ、でもどうせ暇だから、まあ、いつか!」

「OK!」

「じゃあ、いつものとこでねー!」

「お」

「なになに、今日もデート?」雅弥が笑う。

「違う違う、そんなんじゃないよ、愛実とは」「まあ、しいていうなら腐れ縁ってやつ?」

「ふーん、そんな感じじゃねー気もすんだけど・・・。少なくとも愛実はな・・・。」

なにいつてんだか・・・。愛実とは小学校、中学校、一緒に俺にとつちや普通の友達だし、たいした関心もない。まあ、連れて歩くにはかわいいけど・・・。

今日もだりー授業が終わった。なんかつまんねえ、超つまんねえ・・・。何かおもしろいこともそうそうないしなあ。

「拓斗!」愛実が叫んだ。でっかい声。

「どこ行く?」後から雅弥たちも着いてきた。

愛実が言う「逆ハーレムだ・・・。」

ブツ!思わず笑ってしまった。

それから俺たちは009へ寄って愛実のつまんねー買い物につきあって、センター街を抜けていつも溜まっているモックに寄りこんだ。

「ねえ、拓斗」愛実がポテトをほおばりながら話しかける。

「うん、なに?」「今年の夏休みどうしてる?」

「えっ？だって今年の夏は受験対策だろ？」

「えゝ、拓斗ってばそんな事考えてたんだゝ、いがゝい！」

「なに、おかしいかよ？」「だって拓斗からそんなマジな話聞くと
は思わなかったゝ」

「はゝ？」

なんだいったい、俺はどんな風にみられてるんだ？

「ねえねえゝあれはあれ？」「なに？」「ほら、あれだよあれ、ほ
らモデルの仕事・・・。」「あゝ」

そう俺はどういうわけかこの渋谷の街中で去年の夏にスカウトされ、
少しばかりモデルの仕事なんてやっていた。

だからってどうって事もなく、多少のお金が入ってくるから適当に
やり過ごしていた。

ただ、そんな仕事をいくいつかこなしているうちに芝居っていうか
演技っていうか俳優にでもなれたらいいなあ位の気持ちはどこかに
あった。

「実はさゝ俺、八坂さんのつてでさ、いくつかオーディション？なん
ての受けてさゝその1つの事務所からどういうわけかOKもらちゃ
つてさゝ」

「えゝすごいじゃん！」「へゝこんなちやらんぼらんやつ、よく
引き受ける気になったねゝその事務所」

「おい、どういう意味だよ。」「べつにゝ」

愛実は少しばかり不機嫌になった。「でも、それってまじすごくな
い？」雅弥が言った。

「でも、親なんかは大学行けってしつこく言うし、でも俳優？って
いうかそういう世界に憧れってのもあつてさ、正直迷ってるんだよ
ねゝ。」

「でも、拓斗はさゝ大学なんてしょうに合わないし、勉強嫌い！つ
て言ってたジャン・・・」

「まあ、それはたしかにそうなんだけどね・・・」

「っていつか、愛実はどうなんよ？まじな話さあ？」

「うーん・・・私も拓斗と似たようなもんかな・・・」 「テヘ・・・」
「愛実が舌をペロつと出して笑ってみせた。」

愛実は笑うと左頬にえくぼが出来て目の辺りがクシャクシャになるとびきりの美人とは思わないけど。なんかホツとする笑顔の女だ。

「俺はさー、石吹でバイトー」 「えっ？」 皆がいつせいにすつときよんな声で言った。 「石吹って、沖縄の石吹島？」

「そうだよ、他にどつかあるか？」 「海の家って事？」 「そうそう・・・」 「へー」 愛実がぼかんとした顔で雅弥を見ていた。

そこへ、さっきまでチーズバーガーに食らい付いていた翔人と謙太が「俺らーちよつこと部活でてそこそこ受験勉強なんかしてあとは、なあー」 「なあー」 「やっぱこれっしょ！」 翔人と謙太は自分の小指を立てて自分の彼女の事をいつてみせた。

「勝手に言つてな！全くもう・・・！」 愛実はなかば怒り気味にあきれたようにそんな2人をみていた。

彼女かーまあ、それはそれで羨ましい気もするが・・・。しかし呑気な2人だ・・・。

雅弥の家は俺たちが住んでるこの街でそここの工場を経営している、けっこう儲かっているらしい。

雅弥はかねがねやつのおやつさんの工場を継ぐと宣言してたな。

だったら海の家バイトなんていい社会勉強にでもなるんじゃないの。

「ふーん、そかそか、海の家ねー、いいんじゃない」

「だろー、そこでだ、実はー その海の家でさ、もう1人男のバイト探してんのよ」

「へーそうなんだ」 「なっ！拓斗やってみねー？」 「へ？なんで俺よー」

「だってお前、男の俺でさえ惚れる様な色男だろ?」「なに、気持ち悪いこと言ってるのよ!？」

「げ、きもい!雅弥、そんな趣味あったの?ありえない!」そりゃそうだ、俺だってそんな気^けはない。冗談じゃない。

「ジョーク、ジョークよ!」「でもさ、拓斗位の面構えならさあ、拓斗がそこに居るだけで、女の子が寄ってくるかもしれないだろ?」

「したらよ、海の家も儲かっかもしんねえし、バイト代も上がるかもしんねえべ!」「俺は客寄せパンダかつの!!」

「あはは・・わりわり」

「でも、バイトの話はまじよ、まじ。」「だって海の家の仕事ってめんどろそうじゃん、暑そうだし」

「まあ、そういうなって、海でよ、客の注文とってそれを客に渡したり、ボード貸し出したり、浮き輪貸し出したりしてよ」

「んで、適当にかわいい子ナンパして適当にいただいて・・・」「なんだ、そのときとって!」

「そうだよ、女をなんだと思ってるのさ」

愛実の顔はふくれっ面だ。そりゃ、そうだよな・・・。雅弥ってばデリカシーないっていか、空気読めないっていうか・・・

「だってさあ、だってそうだろ?」「なにがだよ?」「夏の海に遊びに来るような女ってさ、ナンパ目当てかそうでなきゃ、彼氏持ちかいくらかくたびれかけてきた家族連れみて、なのが多いじゃん。」「俺は時折、雅弥の考えている事がわからなくなる。

お前の頭ん中はどんな構造してんだ?女の事はっか考えてんのか?これが未来の社長かよ。

「そんなに気張らずさくつと、さくつといい女、いただきーみたいなあ」

「はあ、いつまでも言ってる!」

「でもさ、拓斗」「うん?」「このままだとぼろと夏休み過ぎすよりは、」「うん」

「何かしらの経験とかしたりしてさあゝそれが良くて悪くつてもお金になるんだつたらそれもなんかよくない？」

「まあゝそういう事もありえなくはないね・・・。」「だろゝこれで決まりゝ」

「おいおい、気が早いなあゝ、で、いつ頃から行きゃゝいいわけ？」

「あつちはもう観光シーズンだから早ければ早いほうがいいみたいなんだよ」

「だいたいどの位、行けばいいの？」愛実が聞く。

「2ゝ3ヶ月位だと思うよ」「えゝ、長いなあゝ」

うへゝそんなに長いのかゝ、このバイトは受けるべきではなかった気がするきた・・・

その時、俺はそんな風に思っではいたけれど、だからって断る事でもないのかな・・・？なんて漠然と考えていた。

きっとその時から俺はなにか運命みたいなもの、俺の一生に関わるなにかをそこに感じていたのかもしれない・・・。

「圭、調子はどう？ちよつと雲行き悪いけど大丈夫かな？」

「海憂、心配ないよ、この位、どうって事ない・・・」

今朝方、南西諸島の発生した熱帯低気圧は台風9号へと変わりました。

台風9号の進路にあたる地方の方は急激な天気の変化にお気を付け下さい

「台風9号か・・・大丈夫なのかな？」

3年前の夏、圭はプロサーファアのテストを受けていた。

圭と私は同級生、同じ大学のサーフィンサークルの仲間で、圭は将来、プロサーファアになれるぞと期待されていた。

彼のサーフィンは力強くて綺麗で小麦色の肌と真っ白な歯とブロンズの瞳が印象的だった。

私は初めて彼に会った時から彼の事が大好きになった。時折、みせる翳りつていうかとても

二十歳にはみえない落ち着いた雰囲気か素敵な人だった。

私が、彼と恋に落ちるのにさほど時間はかからなかった。

「大丈夫だよ、圭は！」康さんが言う。

康さんとは圭の4つ上の大学の先輩でもうすぐ待望のお子さんが産まれる。バリバリの海の男、私たち2人の事を何かと面倒みてくれた人だ。

「おーい!!!圭!!!上がれー上がれー!!! でかいうねりが来てる

ぞー！おーい、けーい！！」

ドーン・・・

大きく波が崩れる音がした。辺りを一瞬、静寂が包んだ・・・。

「おーい、救急車、救急車、誰か救急車呼んでー 早く早く！！」
「早く、上げてやれー！！」

何？何があつたの？私は圭がどうなったのか、何が彼の身におきたのか、理由もわからないままただそこに立ち尽くしていた。ただ、だんだんと遠くなっていくサイレンの音だけは覚えていた。

あれからどの位の時間が経ったのかな・・・病院の待合室でボーっ
としていたら

「海憂ちゃん、海憂ちゃん・・・」康さんの聞き覚えのある声がした。

「いいか、しっかりするんだぞ・・・」康さんはただ一言それだけを私に言った。

202号室、その部屋に通された私は愕然とした。そこには顔に擦り傷をおって目を閉じたまま青白い顔をした
圭が横たわっていた。

今、私の目の前にいる人は誰？圭、圭なの？さっきまであんなに元気で一生懸命波を追っかけていた圭なの？海に入る前、「頑張ってくるから・・・」と言って優しくキスしてくれた圭。

私が落ち込んでいる時、いつもそばにいて肩を抱きしめてくれた圭。優しくって強くって私の大好きだったその人はそれからずっと眠りについたままになってしまった。

端正に整ったその顔は、私をいつそう悲しませた・・・。

「どういう事ですか？」康さんが病院の先生をどなりつけた。

「ですから、津山さんは岩で頭と首を強打されてまして、その言いにくいんですが・・・」

「リハビリすれば回復するんじゃないですか？また、サーフィン出来るんじゃないんですか？」なおも康さんは先生をどなりつける。

「ですから、先ほど申し上げましたが、津山さんは頭と首を強打されていてリハビリどころかこのまま寝たきりの状態になってしまふんです」

「そんな、そんな事あるか、そんな事って・・・」いつも冷静で明るい康さんが涙を流して言葉を詰まらせた。

「きつい言い方になってしまいましたが、あれだけの事故で命が助かったという方が奇跡なんですよ・・・。残念ですが・・・。」

圭がこのまま寝たきりになるなんて、その時の私はあまりのショックと襲いかかってくる現実を目の辺りにして泣くことも出来なかった。

涙も出ては来なかった。口さえも開けないでいた。

ねえ、圭？これから私は何を支えに、何をどうやって生きていけばいい？1人残された私はどうやって生きていけばいいんだろう？目の前にいる圭は何も答えてはくれなかった。

それから、私は奇跡を信じて彼の顔を毎日見に行くようになった。いつ行っても私の事などわからないと思っていても、それでもそんな毎日でさえ不思議と幸せを感じていたんだ。

長い闘病生活の中で圭がたった1度だけ涙をこぼした時があった。だからといって圭が目覚めることはなかったけれど・・・。
きつと、圭は悔しかったんだろうな、あんな事故さえなければ

あなたの幼い頃からの夢だったプロサーファーになれてたかもしれないんだもんね。

私はその時の圭のその顔を忘れることが出来なかった。私が圭の代わりにプロサーファーを目指そう……。彼の夢、叶えよう……。

圭の身体は日に日に元気をなくしていった。遅しく分厚かった胸板も、真つ黒に焼けた肌も、すーっとのびて綺麗な指も一まわりも二まわりも小さくなっていった。ただ綺麗に整った顔立ちだけは不思議と変っていなかった。

こんな事言ったらおかしいかもしれないけれど、それでも圭はかっこよかった。

あゝあちゝ

「おーい！拓斗！」

「へゝい！」

ここ海の家、潮騒にバイトに来てから3日目。少しずつ仕事にも慣れてきた。

しかし暑い！猛烈に暑い！ここつてば、こんなに暑いとこだったのか・・・？。

「おい、拓斗！これあそこのお客さんに届けて！」

「はいはゝい！」

「はいは一回だけでしょ！」女将さんが言う。

ここ海の家、潮騒の経営者の関さん夫妻はよく働く、朝から晩まで笑顔を絶やすことなく働く。

あのパワーはどこから出て来るんだ？

女将さんは歳のわりにはさばけていて明るくて面倒見のいいおばちゃんだ。

ここ潮騒がこんだけ忙しいのもわかる気がする。

なんか2人をみると楽しそうだし、なによりも2人とも海が大好きっていう感じが湧き出ている。

暑さの中での仕事はきついけど目の前にある海を眺めていると元気がよみがえってくるっていうか、パワーをもらえるっていうか、そんな感じがする。

そんな気持ちでそれから1週間が過ぎた。

俺もかなり日に焼けて肌の痛さなんて忘れてきた。

ここでバイトをする目的、目的？とはいわないか・・・。

とりあえずかわいい子でもナンパしてそれなりに楽しもうという本題は全くといっていいほど果たされていない。

そんな暇さえもほとんどない。暑さと忙しさの中で、それでも俺はこんな仕事も悪くないなって思っていた。

たまに休憩なんてのがあって海辺に行ってもすぐウトウトと眠くなる。でも、こんな暑いところでウトウトとしようもんなら

身体のアチコチがジリジリいつている気がして、なおいつそう疲労がたまっていく。

雅弥と同じ。ナンパなんてのは出来るわけもなく、あてがはずれてややへこみ気味だ。

「人生なんてそう甘くないなあ」雅弥がポツリとつぶやく。んなの、あたりまえろ・・・。

でも、俺も雅弥と同じこと考えなくもないんだけど・・・。

「こんにちは！」

「やあゝみゆうちゃん！」

「ちはゝおやっさん！景気はどうよ？」

「ぼちぼちだね」

「そういうみゆうちゃんの調子はどうなのよ？もうすぐプロテストでしょ？」

「うん、そうなんだけど、なんかいまいちね、調子が出ない感じ・・・」

「そうかゝでも、まあ、もうちよいがんばってみ！」

「はいよ！じゃゝいつものかき氷ちようだい！」

「あいよ！」

「あれゝ新入りくん？」

「あゝこいつ、ここでこの夏バイトしてる拓斗っていうの、古坂拓斗」

「拓斗、ちょっとこっちこい！」

「こんにちは」

「こんにちは！帆苅海憂っていいいます。よろ〜」

「はい、古坂拓斗と言います」

「とさか・・・くんって言うの？鶏の頭みたいな名前〜あはは・・・」

「

「違います。古坂っていいいます。こ・さ・か・・・」

「あ〜ごめんね〜、古坂君ね。あらためてよろしくね〜」

「古坂君、綺麗な顔してるね〜 若〜い ちょっと生意気そう・・・」

「

「あつ、ごめん、ごめん」

「は？なんだこの女、やに色黒くね？まるで男みたいだ。なにがとさかく〜んだ。」

「気が強そうな女！逞しい女！海の女ってこんなもんなのかな？」

「俺が初めて彼女、海憂に会った時、正直、女としての魅力や優しさなんて感じていなかった。」

「古坂く〜ん、古坂く〜ん！かき氷ちょうだい、いつものね〜！」

「帆苅さん、今日もかき氷つますか？」

「いいの、いいの。これ食べないとなんか調子でないんだもん」

「みゆちゃんは今にかき氷好きだね〜」康さんが笑っている。

「いいじゃんね〜おいしいんだもんこの！ねっ！古坂君！」

「帆苅さん、拓斗でいいっす」

「え？だつて・・・」

「ここの人俺の事みんなそう呼ぶから」

「そう、じゃ、遠慮なく 拓斗！」

彼女に自分の名前を呼ばれた時、まじに照れた。そして胸の奥がわけもなく”キュっ”となった。

「私の事はみゆっでいいよ。みんなそう呼ぶから・・・ねっ！」
「はあ〜」

みゆうはそれから毎日毎日波乗りの練習が終わるところで潮騒でかき氷をほおばった。

いつも明るくって、いつも笑ってて、時には怒ったりして、その表情がクルクルクルクル変わる。

早めに海を上がってきたと思ったら、またふいつと海に入っていく。彼女が海へ行く時、ふと香ってくる髪の毛の香りが俺の心をいつもドキリとさせる。

なんか不思議な女だ。そんな彼女の事を見ているうち、俺は彼女の事が気になり始めていた。

ある日の午後、海水浴に来ていたお客さんの子供が溺れかけそうになった時があった。

その時、真っ先にその子供を助けたのが拓斗だった。

拓斗のその時の顔が18歳にはみえないほど逞しく感じたんだ。もしかしたら私は、その瞬間に5歳も年下のその生意気な男の子に心、さらわれたのかもしれない……。自分自身も気が付かないうちに……。

「拓斗〜！」どっかで聞き覚えのあるでっかい声。愛実だ。

「愛実！どうした？」

「うん、バイト休み取れたから思い切つてきちゃった！」

「はあ？」相変わらずとっぴょうしのない行動をする女だ。

「でもね、宿、一泊分しかとれなかったよ〜残念！」

あたりまえだろ、こんな最盛期の海の宿なんて、一泊だけでも取れたのが奇跡だと俺は思った。

「拓斗が下宿している近くのK's e a ' s っていうペンションだよ」

「しかし、お前もよくこんなところまで来たな〜」

「だってもう10日も拓斗に会ってないんだよ〜」

「そうかあ〜もうそんなに経つかな〜……」

「そうだよ〜もう拓斗ってばつれないなあ〜」

愛実の久々の笑顔はみように懐かしかった。

ここんとこ忙しかったからな〜……。

愛実は俺の腕にからみつこうとする。

俺はその愛実の手をふりはらうでもなく、愛実のしたいようにさせ

ていた。

相変わらず元気なやつだ・・・。

俺はなんととはなしに愛実の肩越しに見える海を眺めていた。

その時、海憂の姿が目止まった。

彼女は夢中になって波を追いかけている。

波を追っている時の彼女は海の家潮騒ではしゃいで笑ってかき氷を口いっぱいほおばっている彼女とは別人だ。

真剣な眼差しでいい波をみつけ、タイミングよくボードを滑らしていく。

風になびく長い髪が女を感じさせる。けっこういい女なんだな・・・。

なんだろこの言いようのない感情は・・・？

もしかしたら、俺は彼女の事、好きなのかな？まさか・・・でも・・・

「拓斗〜！」愛実がでっかい声で俺を呼んだ。

ああ〜今日は、調子、わる〜い！なんでかな？

あれ？拓斗だ。女の子と歩いてる・・・

彼女？なのかな？拓斗と同級生くらいかな？やっぱ若いね〜かわいいなあ〜

あの子と居る時の拓斗ってあんなふうに笑うんだあ〜。

・・・

なんで拓斗とあの子の事、こんなに気になるんだろ？

私には圭がいるじゃない、圭が・・・

でも、この何日か拓斗と話したり、海で一緒に泳いだりしている時は圭の事、一度も思い出したりしなかった・・・。

拓斗と出会う前はそんな事なかったのにな・・・。

でも、今、自分の目の前に見えるその光景を私は見れなかった。
嫉妬？まさかね・・・

おかしいの・・・。こら！しっかりしろ！海憂！

でも、自分の気持ちには嘘はつけないな。

その時から彼は、私の心の中に確実に入り込んできたんだ。

あゝあつゝ・・・」愛実が目覚めた。

「げゝまだ朝の4時じゃん。そうだ、拓斗んとこいつちゃあゝ、もう起きてるかな？ま、いいや」

トントントン・・・。愛実は軽快に拓斗の下宿しているアパートの階段を上がつていった。

愛実は拓斗が下宿しているすぐ近くの宿に泊まっていた。

「おはよう！」・・・」

「おはよう！！拓斗！」

「えっ！」俺はまだ寝ぼけ眼まなこのまま起き上がった。

「愛実？なんでいんのよ・・・！」

「えへへ・・・だって目がさめちゃったんだもん・・・。」

「えへへ・・・じゃないだろうまじかよゝもう少し寝かせてくれよ」

「だめだめ、起きて！私、今日はもう帰んなくちゃいけないんだから・・・。少しでも長く拓斗といたいのに！」

「はゝ！？」意味がわからん。ま、いいか・・・

「んじゃ、ちよつと海にでも行ってみるか？朝の海は気持ちいいぞ」

「えゝ、ま、いいか。じゃあ、その帰りコンビニ寄って朝ごはん買おうよ！ねっ！」

なんか愛実は嬉しそうだ。俺はまだ半分眠くてしょうがなかったけれど・・・。

トントントン・・・

下宿の階段を2人は並んで下りた。

「わゝ本当だ、海がきれいゝ！」「だろ！」愛実は楽しそうに笑っていた。

「あれゝ拓斗じゃない？おはよゝずいぶん早起だねゝ」

一瞬、俺はその声にドキツとした。なんでこんなところで・・・

「あつ！海憂さん！おはようございます」俺は極力冷静を装って挨拶をした。

「ね？誰？拓斗」愛実が俺に聞く。

「あゝここで知り合つた海憂さんっていうんだ」

「帆苅海憂といいます。よろしくね・・・」

「成瀬愛実といいます。拓斗の同級生です。どうしても拓斗に会いたくて来ちゃいました。」

「あら、そうなの・・・」

「海憂さんはこれから練習ですか？」その時の俺はきつとどうしていいかわからない顔をしていたに違いない。

どう考えても愛実が俺の部屋に泊まったにしかみえないもんなあゝ。言い訳がましく言うのも変だし・・・。

頭の中が真っ白になった感じがした。

「じゃ、練習しなきゃいけないから、またね、拓斗」

「はい・・・また」なんかそっけないなゝどうしたんだろう？

あの子は拓斗のなんなんだろう？彼女なのかな？やっぱそうだね、こんなに朝早く、しかも彼の下宿先から2人で出てくるなんて普通な関係ではないよね・・・。痛っ！やだ私ってばこんなところでこけるなんてどうかしてる・・・。なんだか涙が出てきた・・・。

「海、行ってみるか？」「うん、そうだね。」俺はとりあえず愛実を海に連れ出す事にした。

「ね、拓斗？バイトどう？」「うゝん・・・」「かわいい子ナンパ

した？」「うん、まあ」「この服どう？」「あ、いいんじゃない」「ね、拓斗？海憂さんでどんな人？」「えっ！……」「どんなってべつに……」

今日の拓斗はなんかへんだ……。どつか上の空っていうか、私の事なんて眼中にないっていうか……。舞い上がってる感じ。

特に海憂さんに会ってから……

「拓斗、拓斗ってば！！」「えっ、なに？」「さっきからどこ見てんのよ！」「どこってべつに……」

「べつにじゃないでしょ、海憂さんの方ばかり見てる！私の事なんて見てないでしょ！」俺はハツとした。

愛実を自分の目の前に置きながら俺は海憂の事ばかり目で追っていた。

「最初からわかってた、拓斗が私の事、幼なじみにしか思ってないって。それでも私は拓斗の事が好き！」

愛実が抱きついてきた。

その時、大きな波が碎ける音がした。

「おい、愛実、いったいどうしたんだよ？」「……」「おい！」「顔を見上げた愛実は涙顔だ。

「拓斗のばか！！もう、帰る……」

愛実がもうダッシュで走って行こうとする。「おい、愛実、ちょっと待てよ、おい！！」

2人の姿が私の視界から消えていく……。拓斗は彼女の事好きなのか？

たぶん、あの愛実ちゃんて子は拓斗の事好きなんだろうな……。拓斗はどう思ってるんだろ？きつと好きなんだろうな……

若くってかわいらしいあの子の事・・・じゃなきゃ拓斗の部屋から2人仲良く降りてなんかこないもんな。

こんなところで私は撃沈するんだ・・・そんなのってそんなのってやだ・・・。

私ってば、こんなに彼の事好きなんだ、こんなにも好きになっていたんだ・・・。

私はこみ上げてくる涙をぬぐう事が出来なかった。

「愛実、おい！」「拓斗、拓斗って私の事好き？ね、答えて、今すぐここで答えてよ」

「なんで、お前、急にそんな事言うんだよ？」

「だって、拓斗、わかりやすいんだもん！あなたが今ここでどんな事、考えてるか私にはわかる」

「何がわかるっていうんだ？俺の何がわかるって言うんだ？なっ、愛実？」

「拓斗は拓斗は海憂さんの事好きなんですよ？」

「わかるんだよ、今まで、ここまでこうしてあんたと過ごしてきたあんたの気持ちが私にはわかる！」

図星だった。俺は海憂に初めて会った時からきつと好きになっていったと思う。ただそれに気が付かない振りをしていたんだ。

彼女は俺より5つも歳が上だし、俺の事なんてガキだと思っているに違いない。

でも、そう思われてもやっぱり俺は海憂が彼女の事が頭から離れなかった。こんな気持ちは生まれて初めてだった。

「拓斗、1つだけ答えて・・・」愛実が泣きながら言う。

「私の事、少しは考えてくれてた？私の事、少しでも好きになってくれてた事あった？」

俺はしばらく考えた後、愛実に言った。

「正直、俺はお前の事は幼なじみとしてしか見ていなかった、ごめ

ん、でも、これだけは言う、お前の笑顔に俺は何度となく助けられたし

ホッとしたりもした、でも、海憂に対する俺の気持ちと愛実に対する俺の気持ちはあきらかに違う」

「拓斗、正直だね・・・」「お前に嘘を言ってもどうせバレバレだろ?」「だね・・・」

「でもね、ここへきて拓斗みてたらなんとなくわかってたよ、なんか、拓斗、楽しそうだったし・・・」

「私も、きっぱり拓斗の事はあきらめる・・・しばらくは、辛いだろうけど。バイト先でね、ちょっと気になる人いるんだ」

「愛実、嘘をつけ!そんな余裕はお前にはないだろ?」「へへ、バレたか・・・」

「当たり前だろ、何年、お前と付き合っているとってんの?」「だよね」

「でも、拓斗の本当の気持ちわかったら、なんか安心した、安心して事もないか・・・」

「正直に本当の気持ち教えてくれてありがとう」「愛実、俺のほっこそ、悪かった、お前の気持ちに気づかなくて」

「うん・・・。んじゃ、私、もう行くね!学校で会おうね!下手に気を使わないでね、悲しくなるから、今まで通り、幼なじみのおばか同士で行こう!」

「なんだ、それ?」「いいじゃん、ばかなんだから・・・」「まあな」

「バイバイ!」

少し元気になった愛実はその日に帰って行った。愛実には悪いと思ったけど、愛実が帰った後、俺はまじにホッとした。

もう、これ以上、海憂に誤解されなくなかったし、海憂の事をじっくり考えたりもしたかったから・・・。

その時、愛実が泣きながら歩いていたなんて、これっぽっちも考え

もせずに・・・。

その後、いつも海憂が波乗りの練習をしている所についてみたけれど、海憂の姿はどこにもなかった。

愛実が東京に帰った後、みゆうはしばらくここ海の家潮騒に姿を見せなかった。

彼女がいつも波乗りの練習をしている場所に行っても彼女の姿は見えなかった。

俺は彼女に会えないその1日1日を長く感じていた。みゆうに会いたいな。まじで・・・。

風邪でもひいたのかな？怪我でもしたのかな？

そんな日が続いてしばらくした後、彼女はここへやってきた。

俺はまじで嬉しくって彼女と早く話しがしたかった。

そんな時の俺は顔が赤かったかもしれないな・・・。信じられないけど。

「拓斗〜！」

「みゆうさん！おつす、ひさしぶりっす！」

「みゆうちゃん！ひさしぶり〜」「みゆうさん！」

バイト仲間の康さんや涼平さん、俊さん、そして雅弥がみんな挨拶をしていた。

「よ〜！みゆうちゃん！」「あ〜おやつさん！おひさ〜」

「みゆうちゃんがしばらく海に來ないなんて珍しいね？どっか怪我でもしたか？」

「う〜ん、怪我はしてないよ、ちよつと風邪ひいちゃって・・・」

「風邪？珍しいね、いつも元気印いっぱいのみゆうちゃんが風邪なんて・・・」

「康さんは、ばかは風邪ひかない！とでも言いたいんでしょ？」

「そうは言ってないよ・・・」

「あはは、康さんたら・・・、おもしろいの〜」

そこにはいつもの海憂がいた。俺はそんな彼女を見てホッとした。ただ、康さんはそうは思ってなかったみたいだけど……。

そんな時、康さんがつぶやくように小さな声で言ったんだ。

「みゆうちゃん、風邪ひいても怪我をしても練習だけはさぼらなかつたんだけどな……。」と。

嘘ついちゃったな……。私は風邪なんかひいてなかった。

あの朝、拓斗と彼女を見かけたあの朝から心が重くって辛くって海に行くのも嫌だった。

それになによりも拓斗を見るのが辛かった。

拓斗の横になぜ私は並んでないんだろ？ なんであの子が拓斗の横に居るの？

なんで、拓斗の横に私は居ないんだろ？ そんな事をずっとずっと強く強く思って、ともかく彼に会うのが辛かった。

それだけだった。

これまで、私の横には圭が居て、彼の存在が大きくて彼以外の男の人なんて目にも留まんなかったけど拓斗は違った。

いつの間にか、拓斗の存在は私にとって圭よりも大きく、そしてずっとそばに居てほしい、そんな人になつていた。

でも、彼は私よりも5歳も年下。そんな男の子が私の事なんて相手にするわけがないな、あきらめたほうがいいのかも。

でも、それもやっぱり辛い事。そう思えばそう思うほど苦しくなつて、ならいつその事片思いのままでいいなんて

彼がそこに居てくれればそれだけでいいなんて、そういう風に自分の気持ちを整理するのに時間がかかったんだ。

拓斗……。それでも私はあなたが好き！

「おやつさん！」「なんだい？」「今日、拓斗、借りてもいいかな？」「へ？」「海憂が突然変な事を言った。」

俺はレンタカーじゃないんだぞ。そう思いつつも俺は正直嬉しかった。後はおやっさんの返事を待つだけだ。

「いいよ！いいよ！ただで貸してやるゝ、はっはっはっ！」

おいおい、おやっさん、勘弁してよゝ。でも、まじ、嬉しかったなゝ。

「なゝ拓斗、いいだろ？」

「俺は別にいいすけど、店、大丈夫ですか？」

「なゝに、今日はそんなに忙しくないからみゆうちゃんに付き合っ
てやんなゝ」

「んじゃ、そうさせてもらいます！」「あいよゝ」

げゝちよゝラッキー！海憂とデートだゝ。デート？そうじゃないよ
な、これはやつぱり・・・。

でも、たとえ少しの時間でも海憂と一緒にいられるって事は・・・
もう最高の気分。俺は自然と笑みがこぼれて止まらなかった。

海憂からの突然の誘いに俺は驚きながらも彼女と2人で一緒にいられるっていう事が妙に嬉しくっていつになく自分の心のテンションが上がっていると感じていた。

海の家 潮騒からさほど遠くないところにパーキングがある。

海憂はせつせとそこへ歩いて行った。俺も彼女に遅れまいと必死に彼女を追いかけていた。

歩くのはやゝ。でも、そんな小さな時間さえも今の俺には宝物だ。彼女のちよつと華奢な背中が愛おしくてならなかった。

このまま、後ろから抱きしめたい。俺はそんな妄想を勝手にふくらませながらなんかひとりあせていた。冷静になれ！オレ！！

「ささ、乗って乗って！」

「この車にですか？」

「そうよ、これは私の相棒！」

「失礼します」

そこには海の色に似た綺麗な青い4WDの車があった。いかにも彼女らしくシンプルでなんのかざりつけもないけれどどこか小洒落た感じの車だ。

車に乗り込むと彼女の匂いがした。

「拓斗、私の隣に乗れるなんて幸せもんだぞ！」

彼女はそう言って舌をペロツと出して笑った。こいつ、最高！おつと、何を考えてるだ・・・でも、やっぱ、いい女だ。

私ってば、何、言ってるんだろ？大胆な事、言っちゃったなあ。でも、

本気で言っただぞ！拓斗！　なんてね・・・私のほうが幸せなのかも・・・。

国道をしばらく走ってから小さなサーフショップに着いた。

なんかどこか暖か味のある店だ。店の中に入るとそこには、オレンジ、青、赤、黄色等々色とりどりのボードが所狭しと飾ってある。かわいいＴシャツや、ポロシャツ、ウエットスーツなんかもセンスよく飾ってある。

あのＴシャツ海憂に似合いそう・・・また妄想が始まってしまった。やべえ。

「ねえ拓斗、どのボードがいいか選んで！」

「なんで、いきなり、俺、ボードの事なんてあんまわかんないですよ」

「いいのいいの、どの色がいいかだけ選んでくれればいいから」ねっ！

「は」最初にここの店に入ってから１つだけ気になっていたボードがあった。

素人の俺でもいいなあって感じるボード。それは、青色のボードだった。一口に青といっても色々種類があるけれど

そのボードの青い色は表現しようがないほどに綺麗な色をしていた。

「俺はこれがいいと思うんですけど」

「えっ？これ？」

「はい」

「へー拓斗、センスいいね」実は私もこれがいいなあって思ってたのよ

「そうなんすか？」俺はすっとんきょんな声を出していた。

でも、海憂と趣味が合ったなんて俺には快挙だ。なんか、みょうに嬉しい。気持ちが暖かくなった。

「んじゃ、これにしよう！これに決めた！」海憂はいつになくはしゃぎながらそのボードを小脇に抱え店の奥へと入って行った。

なんか嬉しいな。拓斗と趣味が合っちゃった。うふふ……。私はそのボードをかかえて一人微笑んでいた。

手持ち無沙汰になった俺は店の中を見て回っていた。

その時、俺の目の前に飛び込んできた綺麗な青い色の石で作った指輪とプレスレットがあった。

<ターコイズブルー（トルコ石）ターコイズは魔よけの石と言われている。>

持ち主に危険が迫ると、身代わりとなって石が割れたり、色が変化したという伝承が多くあります。

なぜか、ターコイズの不思議な力は人に与えられることによって倍増するといわれていて、大切な人への贈り物とする宝石といわれます。特に、愛する人から贈られたターコイズのリングは、絶大な守護力を発揮すると言われています。>

魔よけの石か……。今度プロテストがあるって海憂が言ってたな。俺はそこにあった指輪とプレスレットのどっちを買おうか悩んだけど

指輪はちよつとガラじゃねーか！っと思いつた。そのそばに置いてあったプレスレットを選んだ。

「お待たせ」海憂が店の奥から出てきた。俺は、いま買ったそのプレスレットをポケットの奥へとしまいこんだ。いつ渡そうかなんて考えつつ……。

それから俺たちは海沿いのファミレスに寄り込んでランチを楽しみつついろんな話をした。

学校の事、海の話 e . t . c . . . その一つ一つの話に俺たちは笑いあい真剣に話をしたりして盛り上がっていた。そんな楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「んじゃね！」海憂が言う。

「はい」

俺がそういつて車を降りようとしたら

「拓斗！今日は付き合ってくれてありがとう！」そう言いながら俺の肩を引き寄せ彼女は俺の頬にキスをした。えっ？

「今日のお礼！」海憂は照れたようにそういった。

そんな海憂が愛しくって俺は自分の指で彼女の唇に触れた。そして彼女のその唇にキスをした。

一瞬、びっくりした海憂の身体をきつく抱きしめながら俺は言った。

「海憂、愛している・・・海憂・・・」

「拓斗、初めて私の名前呼んでくれたね・・・。」彼女の頬から涙があふれていた。

俺は彼女の涙をぬぐいながら

「これ・・・」今日、あの店で買ったターコイズブルーのブレスレットを渡した。

「えっ？いいの、もらっていいの？」

「うん、海憂のために買ったんだ」

「あ、ありがとう、嬉しい、大事にする、これ拓斗だと思って大事にするね」

「拓斗・・・」

「うん？」

「私も拓斗のこと、あ・い・し・て・る」

「まじで・・・？」

「うん・・・」

そして、俺たち2人はお互いを抱きしめあいそして2度目のキスをした。

遠くで波の音がかすかに聞こえていた・・・。

海憂と俺の、2人の気持ちが通じ合った日から何日経った。
もうここにバイトに来てからの位経ったかな？

2人で買い物に出かけたその日に俺たちは初めてのキスをした。
俺はその日からなおいっそう、今までいじょうに彼女のことを好き
になっていた。

彼女をいつでも自分のそばにおいて、彼女のことをたくさんたくさ
ん抱きしめたい。

彼女の唇にもつと触れていたい。

どうかしてるかな？俺？仕事も失敗ばかりしている。情けないな・
・。

「おい！拓斗！」

「あゝ雅弥、お前この忙しい時にどこ行ってたんだよ！」

「わりゝわりゝ、ちよつとな・・・」

「まったく、冗談きついで！」

「へへへ・・・お前に紹介しておきたい人が居るんだよ」「俺に？」

「うん」「おい、こっちこっち・・・」

「こんにちは」

「こんにちは」そこには見たこともない女の子がちょこんとお辞儀
をしていた。

「おい、雅弥、誰だよ、あの子？」俺は雅弥の腕を引き寄せた。

「へへへ・・・とうとう出来ちゃった、俺の彼女」

「彼女？いつのまに、でも、けっこうあの子かわいいじゃん」

「だろ、あゝでも、拓斗、お前、彼女を誘惑なんかするんじゃない
ぞ！」

「なに、ばかなこと、言ってるの?」「俺だって、彼女くらい・・・」
「えゝお前にも出来たの?まじでゝいつのまによゝ」
「いや、違う違う、うなもの出来てねゝよ」「ほんとか?」
「まじで!」俺はなんだか慌てふためいていた。

俺だって本当は言いたい、声を大にして言いたい。俺の彼女は海憂だつて。

海憂にまじで惚れました・・・なんて言ってみたって。
でも、なんとなく雅弥に気が引けて俺はその言葉を飲み込んだ。
海憂と俺の2人の秘密にもしておきたかった。なんでその時、そう思ったんだろう?

「あゝあらためて紹介するね、こいつ、拓斗って言うの、俺の同級生」

「こんにちはゝ古坂拓斗って言います」

「はい、私は山本美咲っていいます、よろしくです」

なんか雅弥にはつりあわないようなおとなしめの子だなあゝ。

「彼女さゝ明るくって優しいのよ、どこことなくみゆうさんみたいな感じだと思わない?」

なにいつてやがる、海憂とは似ても似つかないぞ!俺はちよっぴり腹がたつた。

「なんかさゝ彼女と俺つてさゝ価値観が一緒っていうかなんか運命感じちゃったりしてるんだよねゝ」

「お前、恋愛ボケしてんじゃねゝの?」

「なんだよゝその言い方・・・なに、怒ってんだか!」

「怒ってなんかねゝよ!」

「そうかゝ?ま、いいや」

「拓斗く雅弥くん！」海憂の声だ。俺は1人ドキドキしていた。

「海憂さん」

「こんにちは」

「ちはっす！」

「海憂さん、今日も海？」「うん、そうそう」

「頑張りますね」「まあねあれ？彼女どなた？」

「あゝ紹介します、俺の彼女の山本美咲さんて言います」

「おゝい！みさき」

「こちらは、みゆうさん、プロサーファー目指してんだぜ、かつこいいべ」

「へゝそうなんですか、すごい」

「あら、そうなの、雅弥くんも隅におけないわね」ケラケラと海憂が笑った。

なんか、すごく若い子だゝ18歳位かな？拓斗とおない年か・・・。

「山本美咲と言います」

「あ、そうなの、かわいい名前ねゝ、よろしくね！」

「なんかさゝ彼女とはおない年のせいかな、みように気があっちゃって」

「やっぱタメ年だと楽しいっすよ」

「そう？そうかもしれないわね・・・」

おい、雅弥、よけいな事、いうな！　今、お前、完璧地雷踏んだぞ。空気が読めない男だな！

俺があせりながら、どのタイミングでこの言葉を言おうかと考えているうちに海憂の顔色がみるみると変わっていくのがわかった。

「んじゃ、俺、そろそろ店戻るわ」

「おゝ、あゝ雅弥！」

「なに？」

「おめでとぅ〜」

「なんだよ気持ちわり〜、でもありがとな！」

雅弥はめちゃくちゃに嬉しそうな顔をして美咲って子と手をつないで店の方へと歩いて行った。

そんな2人の姿を見て俺は正直羨ましいと思った。

俺も海憂と手をつないで堂々と俺の女で〜す、なんて言ってみたいとそう思っていた。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか海憂がぽつりと言った。

「なんで、だまつてるの？私とのこと、みんなには言いづらいの？それって私が年上だから？ね、拓斗、どうなの？」

「なんで、なんでそんなこと言うの？海憂？」「だって・・・」

「そう、思ってたんの海憂だけじゃないの？」

「俺はそんなこと、1度も言っていないし、正直、海憂のこと、年上だからなんて思ってたんじゃない」

「もう、いいよ・・・もう、何も言わない・・・」海憂は海へと走って行った。

海へ走っていく彼女の手首にはターコイズブルーの青いブレスレットが光っていた。

俺がプレゼントしたやつだ。ちゃんとつけていてくれたんだ・・・。

俺は、小さくなっていく彼女の背中をただ見ていた。今日の海憂はどこかへんだ。

いったいどうしたんだろう？

そんなに年の差って関係あることか？お互いが信じあってりゃそれでいいんじゃないのか？

俺の頭の中でそんな言葉がクルクルと駆け巡っていた。

わたしは、なんでこんなにイラついてんだろう？

思う通りに波に乗れないから？ 雅弥くん達を羨ましそうに見ていた拓斗の顔を思いだすから？

やっぱり私が5歳も年上だから？

いろいろいろいろ考えていたらなんだか無性に泣きなくなった。

私は海から出て浜辺でへたりこんでしまった。

「みゆうちゃん？ みゆうちゃん？ どうした元気ないじゃないか」聞き覚えのある声、康さんの声だった。

私は、康さんの優しい顔を見たたん、涙がドツと溢れ出してどうにもならなくなった。

「なに、泣いてんだい？」 康さんは心配そうに私の顔を見ていた。

私は、今まであった拓斗とのことを康さんに話した。

「拓斗といると楽しいんだけど、どこか不安になって仕方がないの・・・」

そんな思いのたけを康さんに聞いてもらった。

「康さん、ありがとう、康さんに話をしたらなんだか少し安心した、元気が出たよ」

「うん、いいんだよ、みゆうちゃん、それでいい。泣きたい時は泣けばいい、我慢なんかなくていいんだよ」

「そうだね・・・」

「みゆうちゃん、俺はたいした恋愛経験もないけれど、でもね、相手を信じるってことはとつてもとつても大事なことだよ」

「うん、そうだよね・・・」

「そりゃゝいろいろ不安な時もある、拓斗はまだ若い。でもみゆうちゃんはそれを承知でやつのこと好きになったんだろ？」

「うん・・・」

「だったらやつを信じてみゆうちゃんの思ったようにやってほしいんじゃないのかな？」

「うん、わかった・・・」

「ただ、ひとこと言っておくぞ」

「なに？」

「圭ちゃんのこととはどうするんだ？このままじゃ圭ちゃんにも拓斗にも悪いんじゃないのか？」

「・・・」

「圭ちゃんは寝たきりだし、これから先どうなるかはわからない、最悪な事態も起こりうるかもしれない」

「うん」

「お互いが後悔しないように今のみゆうちゃんの本当の気持ちを圭ちゃんに伝えておくべきではないのかな・・・」

「康さん・・・そうだね、そうしないといけないよね・・・」

「あゝ、たとえば圭ちゃんがその言葉を聞くことが出来なくてもな・・・」

「康さん、わかった、ありがとう、圭に今の私の本当の気持ち伝えてくるね・・・」

「そうだね、それがいい、頑張れよ！」

「うん、ありがとう」

康さんのその言葉を聞いてから、私は圭が入院している病院へ向かった。

ここ最近、私は彼の所へ行っていなかった。

圭のところへ行って圭にちゃんと謝らなきゃ・・・。

202号室 津山 圭殿

圭が寝ている部屋に入った私は、いつ目覚めることもなくベッドに

横たわったままの彼の横顔をながめていた。

彼の頬に触り、髪に触れ、手を握りながら私は彼に謝った。

「ごめんね、ごめんね圭、あなたのそばにずっと居るよって、約束したのに私はあなたを裏切りました」

「あなたより好きな人が現れるなんて思いもしなかった。ごめんね、ごめん・・・許して・・・」

わたしは痩せこけてしまった彼の頬に最後のキスをした。

「圭、今までどうもありがとう、本当にありがとう・・・わたしはあなたの恋人で居られたこと、あなたの恋人だったこと
幸せに思っています」「圭・・・ありがとう・・・」

圭の表情が変わることはなかったけれど、でも、一瞬、彼が笑ってくれたように思えた。

でも、その日が彼とわたしが会うことが出来た最後の日になった。

「おい、拓斗!」「はい?」おやっさんが叫んだ。

「なんすか?」

「今日はもう店じまいだ」

「そっなんすか?」

ここ、海の家 潮騒では毎年、8月の15日には早く店をしまい、仲間うちでバーベキューをするそうだ。

「バーベキューか・・・楽しいそうっすね」

「早く片付けろ!」「はい!」

それから間もなくして涼平さん、俊さん、康さん、雅弥、美咲ちゃん、おやっさん、女将さん達が集まってきてガヤガヤとバーベキューが始まった。

「かんぱ〜い!」「かんぱ〜い!」

「おい、肉、肉!」「これまだ焼けてね」「ピーマンとってくれ」

「おい、雅弥、食いすぎだぞ」「あはは・・・」

「ほれ、みんな、野菜も食べなさいよ!」女将さんの明るい声がある。

「もろこしうまいね」「おい、ビール、ビール!!!」
みんなでわいわい騒ぎながら食べる肉はかくべつにうまい。

「ビール、いただき!」「おい、お前はまだ未成年だろ!雅弥!」

「おやっさん、ま〜堅いことは言わないでさ〜、せっかくなんだから・・・ね!」

「いしあたま〜!」「こら〜なにいいやがる!」

「ったく、お前はいつもそうやって・・・ばかもの!」「あはは・・・」

周りの人は大笑いだ。

でも、俺はそこに海憂の姿がないのが少し寂しかった。

「あつ！みゆうさんだ〜！」「みゆうさん！」「みゆうちゃん！」
みんなが彼女を迎えに行く。

「お〜やつと来たか、こつちきな、みゆうちゃん」康さんは俺の隣に海憂を座らせた。

この間、けんか？みたいな感じになって、それから彼女に会っていなかったから、俺はなんだか緊張した。

「こんにちは」「お〜」

「みゆうちゃん、ここしばらくみかけなかったけど、どうかしたの？」女将さんが彼女に聞いた。

「うん、大丈夫だよ」「そ、それならいいけど・・・」「さ、飲んで、飲んで」

「はい、いただきます〜す！」海憂は、ビールをうまそうに飲んでいくらか機嫌がよさそうに見えた。

いい飲みっぷりだな・・・俺は、彼女の顔を眺めていた。

いろんな話をみんなで語ってたくさん肉を食って、ビールを飲んで・・・気が付いたら陽が傾いていた。

そうだ、俺はここでちゃんとけじめをつけよう。海憂と俺のこと、ちゃんとみんなに報告しよう。

「さて、そろそろ、お開きにしますか？」「そうだね〜」

「あの〜みなさんに報告したいことがあります」

「なんだよ、拓斗あらたまつて・・・」雅弥が言った。

「実は、俺、俺は・・・」

「海憂さんと・・・帆苅海憂さんと付き合っています！！！」みんな、ぱかんとした顔で俺のことを見ている。

しばらくの沈黙の後、俊さんが言った。

「そんなのとづくに知ってたよな」「なあ？」

「うん、知ってたよ」「だってお前わかりやすいんだもん！」

「わっはっはっ！」「みんながいつせいに笑い出した。

「みゆうちゃん、よかったな～おめでとう！やっともみゆうちゃんの気持ちを通じたね」

「や、やだ、康さん・・・」海憂は照れくさそうに笑ってそして少し泣いていた。

「たどりつくべきところにたどりついたな・・・みゆうちゃん」

「うん、おやつさん、ありがとね・・・」

「んじゃ、もう1回、乾杯しますか？」「お～いいね！」「拓斗とみゆうちゃんの恋にかんぱ～い！！！」

俺は、嬉しかった。これで、海憂と堂々と手をつなぎながら海辺も歩ける。そこらへんに買い物にも行ける。

やっ和海憂を俺のものに出来たんだ。これからも彼女を大事にしないきやあな・・・大事に幸せにしてやる！

その日の夜、俺は初めて彼女の家まで送っていくことになった。

海憂はどんなところに住んでるんだろ？彼女の部屋はどんな感じなんだろ？そんなことを考えながら

海憂のその細い指を自分の手からませ、そして彼女の手をぎゅつとにぎりしめていた。

「拓斗、今日はありがとう、あんまりに突然だったからびっくりしたよ、でも、嬉しかった、これであなたと私は

本当の恋人どおしになったんだね」海憂が恥ずかしそうにそう言った。

俺だって海憂と本当の恋人どおしになれたこと、すごく嬉しいんだぞ！

そんな言葉を言いかけたけどそれよりもなによりも今は、目の前に

いる彼女を、海憂を抱きしめたくてただ抱きしめたくて・・・。

俺はそんな気持ちを抑えられなくなって、彼女のことを強く抱きしめそしてキスをした。海憂、愛しているよ・・・。

「拓斗、く、くるしいよ・・・、でもずっとこのままこうしてて・・・」

それから俺たちは、2人肩を寄せ合い、うでくみなんかしながら海岸沿いをゆつくりと歩いていた・・・。

海憂はとても嬉しそうに俺の傍らで笑っていた。

「ね！花火しょ！」

「えっ？花火？」

「うん、さつき潮騒で買ってきたやつだ！」

「いつのまに・・・」

「あはは、なにそんなにびっくりしてんのよ！」

「じゃ、火つけるよ」

「あぶねーから、俺がつけたる！」

「拓斗、やさしー！」

「なにいつてんだ！ちやかすんじゃねーよ！」俺は海憂のおでこに軽くデコピンをした。

「いたー、なにすんのよーあはは・・・」海憂の笑顔は最高に綺麗だ・・・。

俺は、花火に火をつけた。

花火の炎はどこまでも碧く、金色に変わっていくそのさまはどこかはかなく、薄暗い海岸を照らしていた。

「きれいー・・・」

「海憂のほうがもつと綺麗だよ・・・」

「今、なんて言ったの？」

「な、なんにも言っただけよ！」俺はそんな言葉を言った後、みよくに照れくさくなって鼻の頭を掻いていた。

「なんだ、海憂、好きだーとでも言ってくれたのかと思った、うふふ・・・」

「なんだそれ！」

「海憂」「うん？」

「俺から、俺から離れるなよ、いつでも俺の横で笑ってる・・・」
拓斗が照れくさそうにそう言った。

「うん、でも・・・」「うん？」

「でも、私でいいの？私なんかでいいの？私はあなたよりも5つも年上で、こんなおばさ・・・」

「海憂、俺は年の差なんて関係ないと思っている、俺は今、俺の目の前でこうして笑っている海憂に恋をしたんだ」

私の言葉をさえぎるように拓斗が言った。

「ありがとう・・・そんなにまで私のこと思っていてくれて・・・」

「海憂、約束」「約束？」

「うん」「なに？」

「もう、年の差なんて気にするな！海憂が年上だろうとそうでなかろうと俺の気持ちは変わらない、だから気にするなよ」

「うん、わかった、今のままの私をあなたが受け入れてくれたこととても嬉しかった」

「うん・・・」

「そろそろ行こうか・・・」「うん」

海憂の家はそこから少し歩いた小高い丘の上にある。

今、流行のログハウス^{はやし}ってやつでウッドデッキがあって暖かみのあ^{たたず}る佇まいの家だ。

玄関の前には海憂のサーフボードが2、3個立てかけてある。

その中には、初めてデートをしたあの時に買ったあの青いボードが置いてあった。

そういえば、あの時、彼女と初めてキスしたんだっとな、初めて彼女の名前を俺が呼んで海憂が泣いてくれたっけ・・・

玄関を通りぬけたあたりからなんだか急にドキドキしてきた・・・。

海憂の部屋に通されてから、俺の鼓動はますます高鳴った、やべえ

「理性をなくしそうだ・・・まじ・・・やべえ・・・

彼女の部屋の片隅に置いてあるベッドの上の海を思わせるような青い色のベッドカバーが俺の気持ちをますますヒートアップさせていた。

「今、コーヒーでも入れるね・・・」海憂が部屋から出て行こうとした時、俺は自分の気持ちが抑えられなくなった。

部屋から出て行こうとする彼女の腕を取り彼女の体を引き寄せた。

「た、たくと？」

「みゆう・・・」驚いた顔をしている彼女の唇に自分の唇を合わせた。

海憂の香りがするその部屋で俺は彼女を抱きしめた。

小麦色の肌はどこか男っぽいけれど意外なほどに華奢ぎやしゃな彼女のその体は俺の腕の中にすっぽりおさまっている。

「みゆう、みゆう・・・」「たくと・・・」

「ずっと、ずっとこうしたかった・・・」「たくと・・・」

その日の夜、俺たちは初めて1つになった。

お互いのその肌のぬくもりを感じあい、確かめ合い、俺たち2人はいつまでもベッドの中で抱き合っていた。

遠くで波の音が聞こえる・・・

朝陽が差し込むその部屋で俺は目ざめた。

まだ頭の中が覚醒していない。

えーと・・・

そうか、ここは海憂の部屋だ。

じよじよに目ざめていく記憶の中で、昨日の夜のこと、なんで俺が海憂の部屋にいるのかなんていろいろ思い返していた。

そうだ、昨夜海憂は俺の女になったんだ・・・俺の海憂になったんだ・・・

完全に目ざめた俺は、そのことがやたらと恥ずかしくなり照れくさくなった。

「海憂？海憂？」とりあえず俺は彼女の名前を呼んでみた。それが夢ではないんだと確かめたかったから。

隣の部屋で人の気配がする。

目玉焼きが焼ける匂い、トーストの香ばしい香り、コーヒーマーカ―がポコポコという音。

俺はベッドの中からノソッと起き上がると、その部屋へと行ってみた。

「あ、おはよー！」

「あ、はよー」

「なんかテンション低いよー」

「俺って朝はいつもこんな感じ・・・」

「ふーん、でも、少しテンション低くてトーンダウンした拓斗の声

もいいね・・・なんてね・・・」

「なに言ってるの・・・」

「あんまり、気持ちよさそうに寝てたからそのままほっといた、へへ・・・」

<チュっ!>

「!？」俺は海憂の唇に軽くキスをした。

「おはよりのキス」「もう、拓斗ってば」「海憂は照れながら笑っていた。

「さあ〜ごはん食べよう!」

「うん、いただきます」

「いただきます」

「うまい!」「ほんと?ならよかった」きれいに盛り付けられた朝めしはとつてもうまかった。

「こんなふうに海憂の作る朝めしをずっと食べていたらいいな・・・」

俺がなにげなく言っただその言葉をさえぎるように「ごちそうさま・・・」

・「と海憂が言った。

?ごちそうさま　なんかへんな感じ・・・。俺、なんかへんなこと言っただけかな・・・?

海憂も、それいいかもね、とか、これからも作ってあげるよ、とかとでも言ってくれるんじゃないかと思った。

「・・・」

「海憂?」彼女がきゆうに黙り込んでしまった。

「拓斗・・・」「うん?どうした?」

「ひよつとして、昨夜のことか思い出しちゃった?」俺は冗談めかしにそんなことを言ってみた。

いつもの海憂なら、やだあ〜拓斗のすけべ〜とでも言い返してくるかと思ったから・・・。

「拓斗・・・」

「うん、なに？」

「・・・」

「なんだよ？」

「拓斗、わたしあなたに言っておかなきゃいけないことがある・・・」

「なに？そんなにしんみりして、らしくないね」

「冗談じゃないからね・・・」

「・・・わかった」

それからわたしは拓斗に今まで自分がどんなことをしてきたか、どんな恋をしてきたか、どういう気持ちでプロサーファーなんかめざしたか、今の自分の気持ちを洗いざらい彼に話した。もちろん、圭という恋人がいたことも、その彼が今もまだ寝たきりの状態でいることも話した。そして彼を裏切ってしまった自分のことも、ちゃんと彼とお別れをしてきたことも全部、全部、拓斗に打ち明けた。

拓斗はだまって聞いていた。

わたしはそのことで拓斗が自分から離れていってしまうんじゃないかと不安でいっぱいだった。

涙がこぼれた。わたしは拓斗に別れを告げられんじやないかと覚悟を決めていた。

しばらくの沈黙のあと、涙でいっぱいわたしの頬をぬぐいながら拓斗が言った。

「海憂、全部話してくれてありがとう、なんて言っていていいかわからないけど・・・」

「うん・・・」

「海憂、俺は海憂の過去とか海憂の元彼のこととかって今の俺には正直、関係ないと思っている」

だって海憂は今の俺を好きでいてくれてんだろ？それと同じに俺は今の海憂を好きになった、俺とここで一緒に生きている今の海憂が好きだから。で、なによりもどんなことよりも俺は海憂のことが大事だと思っているから・・・」

「拓斗？ほんと？本当に？」

「うん」

「こんなわたしでもいいの？あなたと一緒に生きてっていいの？こんなわたしでも大事に思ってくれてるの？」

「あたりまえだろ、海憂は俺の一番大事な女だよ・・・一番大切にしたい女だ」

「拓斗・・・ありがとう・・・」海憂がまた泣き顔になった。

「海憂・・・もう泣くな・・・」俺たちはふたたび抱き合った。

その日、海憂の部屋から眺めた朝焼けの空はとっても綺麗だった。

そんな空を見ながら俺はこの女を海憂をなおいつそう幸せにしたいと思っていた。

彼女のその肌の温もりを感じながら・・・。

海憂の部屋で過ごした日から
一日が過ぎた。

海憂は相変らず波乗りの練習をしている。

この8月20日にはプロテストがあるからだ。

「よし、今日の波は最高だよーなんかいい感じー」

海憂がそう言いながら砂浜へと上がってきた。

なんだかすこぶる楽しそうだ。俺はそんな彼女の顔をじっと眺めていた。

「あれー拓斗、なんかへんだねーどうかしたの？わかった、Hなことも考えてたんでしょ？ははは・・・」

彼女がケラケラと笑う。

「そんなんじゃないよー、そんなじゃない・・・」

「じゃ、どうしたの？」

俺は、海憂がプロテストを受けるその日に東京に帰らなければいけなかった。

本当はこのまま、ずっとずっと海憂のそばに居たい。居てやりたい。でも、現実はどうもいかない。

俺は、このことをどうやって海憂に告げればいいのか考えていた。

「あー気持ちよかった、この調子ならプロテスト合格出来るかな？ねーそしたら、拓斗、お祝いしてくれる？」

「海憂・・・」

「なに？どんなお祝いしてくれるの？」

「海憂」「うん？なあーに？」

「その日、8月20日の日は、俺、お前のそばにいてやれない・・・」

「えっ？」

「その日、俺は東京に帰らなければいけないんだ・・・ごめん・・・」
海憂の顔から笑顔が消えていった。

「そうなんだ・・・」「ごめんな・・・」

そして海憂は無理やり笑顔を作って「しかたないよ・・・拓斗は東京人なんだもん、しかたない・・・」

「んじゃ、その日が来るまで楽しく笑って過ごそ！2人でさ・・・」
じゃ、もう1回、行って来るね・・・」

彼女は、バタバタと走って海の中へと入って行った。彼女の背中
は泣いていた。俺だって泣きたい気持ちだ。

しばらくしてから海憂がまた俺のところへと戻ってきた。

「ね・・・」「うん？」「しばらくこうしてて・・・」「あ・・・」

海憂は俺の肩にもたれかかり、俺の手を握りしめながらただ黙って隣に座っていた。その時、彼女の肩は震えていた・・・。

「海憂、携帯貸して」

「えっ？」

「俺たちこんなにそばにいるのに、お互いの携帯番号すら聞いてなかった、番号の交換すればいつでも声が聞けるだろ？」

「うん、そうだね、携帯っていう手があったか」海憂の顔によ
うやっとな笑顔が戻った。

それから俺たち二人は、俺が東京に帰るその日まで、暇を見つけてはデートを重ね、お互いの家を行き来し

夜の海辺に遊びに行ったり、もちろん愛をたしかめあったり、2人の時間も2人の思い出もたくさんたくさん作っていった。

あなたの唇が触れたマグカップも、あなたがわたしを抱きしめたその腕も、わたしを好きだと言ってくれたその声も

全部、全部、いい思い出になるんだね・・・

そんな風に彼と過ごす1つ1つがわたしには愛おしくてならなかった。

「ね？明日は何時にここを離れるの？」

「たぶん、夕方になると思う」

「そう、じゃ、テストが終わったら真っ先に飛んでいくよ、拓斗の照れた顔が見てみたいから・・・」

「なんだ、それ・・・」

「じゃあもし海憂が俺が帰る時間に間に合ったら思いっきりキスしまつくてやる」

「やだゝなに言ってるのゝ拓斗、すけべ」

そして俺たちはここ石吹島での最後の夜を2人で迎えていた。その夜俺は、海憂との思い出を絶対消さないように自分の心に刻み込むように彼女のことを思いっきり愛した。

その日の朝、俺は海憂の部屋で目ざめた。
そこにはもう海憂の姿はなかった。

キッチンへ行ってみると朝めしが用意してあった。そのすぐそばに
置き手紙が置いてある。

* 拓斗へ

あんまり気持ちよさそうに寝てるからわたしはこのままテストに
行つてきます。

絶対絶対、合格してみせるね……。そして、あなたのこと見送
りにいくね……

あなたがくれたブレスレットしっかり付けていったよ。これを拓
斗だと思つて頑張つてきます。

- 海憂 - *

P · S I LOVE Y

O U

海憂頑張れよ……

俺は海憂の部屋をあとにし、海の家 潮騒へとむかつて行つた。
今日が俺がここで働く最後の日だ。

「おはよ〜っす!」

「お〜おはよ〜!」「はよ〜!」

「いよいよ、今日という日が来ちまったな・・・」雅弥が寂しそうにつぶやいた。

雅弥の彼女、美咲ちゃんは一足先に東京に帰ったという。そか、美咲ちゃんは東京人とうきょうじんだったけな・・・。

俺はそのことがすごく羨ましくてならなかった。俺だって、俺だって海憂をこのまま連れ帰りたい・・・。

「おい、みんな、集まってくれー!!」おやつさんが言う。

そこには、飲み物やら、やきいかやら、やきそばやら、海の家 潮騒の名物？がところせましとおかれていた。

「さあーで、みんな 集まったか？」

「おい、拓斗、雅弥、今日までご苦労さんだったな、気持ちばかりのお別れ会をやるぞ！」

「まじっすか？」雅弥が驚いた口調で言った。

「かんぱーい！かんぱーい！」

「2人とも東京に帰ってもこのこと、ここで知り合った人たちのこと忘れるなよ！」

「は、はい！絶対に忘れません」

「ほんとか？雅弥？」「わはは・・・」みんながいつせいに笑い出した。

「拓斗、おい、拓斗！」康さんが血相を変えてやって来た。

「あゝ康さん、どうしたんすか？そんなにあわてて・・・」

「みゆうちゃん、テスト会場に来てないんだって！」

「えっ？だって、今朝、置き手紙置いてありましたよ、テストに行つて来るねって・・・」

トウルルル・・・トウルルル・・・

突然、康さんの携帯が鳴った。

「みゆう、みゆうちゃんかい？なにしてるんだよ？テストはどうし

「たんだ？」

あわてる康さんの声が聞こえる。

「えっ？なんだって、死んだ？」

えっ？死んだってなにが？誰が？俺は海憂の身になにかおきたんじやないかと心配でならなかった。

「拓斗・・・」

「康さん、いったい何があつたんです？海憂になにかあつたんです？」

「いや、みゆうちゃんじゃない・・・圭ちゃん、圭ちゃんが今しがた亡くなったそうだ・・・」

圭ちゃん？それは海憂の元彼、津本 圭さんが亡くなったという知らせだった。

「康さん、海憂は海憂は大丈夫なんですか？」

「みゆうちゃんは、泣いていたよ、電話口で泣いていた・・・」そういう康さんも顔中涙でクシャクシャになっていた。

「俺、海憂のそこに行つてきます」俺が走り出そうとした時、康さんが俺を止めた。

「拓斗、今はそつとしといてやつてくれ・・・彼女のためにも頼む・・・」

俺は、しんみりしてしまったその場にただ立ち尽くしていた。

それでも時間は待つていてはくれなかった。

「じゃな、拓斗、雅弥、元気だな！また遊びに来いよ！」潮騒の間達の手を振っている。

そこに海憂の姿はなかった。海憂の携帯も繋がらないままだった。

そんな中でも、容赦なく東京へ帰る時間は近づいていた。俺と雅弥はただ無言のままだった。

「じゃ、俺はここで・・・」雅弥が言った。

「拓斗、なんて言っていていいかわからないけどみゆっさんにきつとまた会えるって・・・」

雅弥はそれだけを告げて電車から降りていった。

ブルルル・・・ブルルル・・・俺の携帯がふいになった。

着信 海憂 海憂からの電話だった。

「もしもし、海憂、海憂、大丈夫か？海憂！」

「た・く・と・・・」

「海憂・・・」

「拓斗、今日、送りにいけなくってごめんね、キスしてあげられなくてごめんね」

「なに言ってるんだよ！」

「俺の方こそ、海憂がつらい時、そばに居てやれなくってごめん、支えてあげられなくてごめん」

「たくと」彼女が電話の向こうで泣き崩れていくのがわかった。

「海憂、いいか、海憂、俺たちはどんなに離れてもいつも一緒だ、お前が生きている限り俺たちは一緒なんだぞ、わかったか？」

「うん、うん・・・わかった」

「つらい時はいつでも電話して来い、俺がそっちにいける時には必ずお前に会いに行くから・・・」

「うん、わかった、ありがとう、拓斗 愛してる・・・」

「俺も愛している・・・」

夏が終わりを告げる頃、一通の手紙が俺の元へと届いた。

* 拓斗へ

拓斗、元気ですか？

わたしは元気です。

この夏のあなたとの思い出をすっかり心に刻んで一日一日を大切

に生きています。

康さんやおやつさんたちに囲まれて時には励まされて支えられて一生懸命頑張っています。

たまに東京の方を眺めてはため息がでちゃうけどね・・・。

本当はあなたの元へと飛んでいきたい・・・。

話したいことは山ほどあるけれど今日はここでやめときます。

あなたに会いたくなってしまうから・・・。

じゃ、元気でね・・・。

- 帆苅海憂 - *

海憂 会いてえなあゝ

海憂 ずっとずっと愛しているよ・・・

海憂から手紙が届いてから

俺は俺なりにいろいろと頑張っていた。

単位が足りない学科や生活態度、今までの俺とは「別人になったね・
・」なんて愛実や雅弥に冷やかせられながら・・・。

その時の俺は俳優という道を選ぼうと真剣に考えていた。

少しでも大人になって少しでも男になって早く海憂をここへ連れて来たい。

この東京で海憂と一緒に暮らしたい。そんな気持ちがなおいつそう俺をせき立てた。

頑張らなければ・・・。

そんな気持ちが固まった頃、俺は海憂に手紙を出した。

*海憂へ

元気でやってますか？

俺は早く一人前の男になって海憂を迎えに行きたいと思っています。

でも、気持ちばかりが先走って空回りしてる俺がいます。

情けないな・・・今、君はそんなこと思って笑っているかな？

ただ、今のままの俺では君を守ること君を幸せにすることもできなくなって思っています。

まだ、自信がありません。だから、3年待っていてください。

3年たったその時には俺は必ず君を、海憂を迎えに行くから・・・。

これはまじな話だよ、海憂。

3年後に君を初めて海憂と呼べた、あの海で僕は待っています。
海憂も待っていてください。

- 古坂拓斗 - *

P . S I LOVE

YOU

その手紙を出してからしばらくして、俺は高校を卒業し、高校時代からやっていたモデルの仕事をこなしながら俳優養成学校やら音楽教室やらに通い、無我夢中でここまでやってきた。

ただ、彼女を海憂を幸せにしてやりたい、そんなきもちいつしんでここまで頑張ってきた。

そして、あつという間に3年が経っていた。

俺はふたたび石吹の海に立っていた。

ここは海憂と初めてキスした場所だ。あの時、海憂が、「わたしの名前初めて呼んでくれたね」って泣いてくれた場所だ。

海憂との待ち合わせの時間が刻一刻と過ぎていく。俺は煙草をくわえた。「ふ」煙草の煙を吐き出した後、顔をあげた俺に

飛び込んできたその顔・・・海憂だ・・・俺は煙草をあわててもみ消し彼女が走ってくる方向へと走り出していた。

「海憂~~~~~! 海憂~~~~~!」

「拓斗~~~~~!」彼女が俺の胸へと飛び込んできた・・・

「拓斗、拓斗、本当に迎えに来てくれたんだね、拓斗、会いたかった~~~~~」

「海憂、待っていてくれたんだね、やっとお前を迎えにこれた・・・」

「海憂、会いたかった・・・」

俺はその言葉だけ告げたあと、海憂をきつく抱きしめた。

「もう、離さないよ、海憂のことぜったいに離さない・・・」彼女はただだまってるはずいた。

しばらく、海辺を2人で歩いたあと、海憂の家へ行った。そこは3年前、海憂を初めて抱いたその時となんら変わりなかった。

俺は海憂をきつく抱きしめそして彼女を抱いた。海憂は嬉しそうに俺の腕の中で笑っていた。

「なあ、海憂」「うん？」

「俺と一緒に東京へ行かないか・・・」「えっ？」

「俺と一緒に東京で暮らさないか？」

「いいの？本当にいいの？」

「あゝ、俺は海憂とずっと一緒にいたい・・・」

「ありがとう・・・拓斗、ありがとう・・・」そう言ったあと

「拓斗、煙草の香りがする・・・大人になったんだね・・・」海憂がニコツと笑ってみせた。

海憂の腕には俺が彼女と初めてデートをしたとき、俺がプレゼントしたターコイズブルーの綺麗なブレスレットがキラキラと輝いていた。

俺が21歳 海憂が26歳の夏だった。

雨 息を切らして

クルマの中へ

も 見えなくなつて

くるまっていた もう寒くないね

も雨

てキミが笑う

さ募らせてく この瞬間を

伝わるように そう抱きしめて

間へと 差し込む光り

画の世界 そう祈るような

い冗談

てキミが笑う

波音をかき消す通り

転がり込むように

遠くに霞んでる人影

ふたりただ毛布に

久しぶりの海はいつ

『誰のせいだろう』っ

せつなさよりも愛し

どんな言葉より強く

ちぎれる雲間から波

昔どこかで見た 絵

なにげないくだらな

『笑えないよねえ』っ

に感謝しよう 心を込めて

やっと出会えた運命

焼きつけない 大切に

どんな想いより強く

る羽 どこへゆくのだろう

海鳥の群れ 風を切

ボクらは羽ばたける

明日へと 未来へと

さ募らせてく この瞬間を

せつなさよりも愛し

伝わるように 抱きしめて

どんな言葉より強く

感謝しよう 心を込めて

君と出会えた運命に

焼きつけない いつまでも

どんな想いより強く

recious one

Forever, p

gracious time

And ever

ot the only lonely one

You're, n

recious one

Forever, p

gracious time

And ever

014
と
(5)

(shiosai
Smap
エスマップ
{
S
M
A
P

o	o	o
t	t	t
h	h	h
e	e	e
o	o	o
n	n	n
l	l	l
y	y	y
l	l	l
o	o	o
n	n	n
e	e	e
r	r	r
y	y	y
o	o	o
n	n	n
e	e	e
Y	Y	Y
o	o	o
u	u	u
re	re	re
,	,	,
n	n	n

page 16 | 新しい生活 | (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

登場人物

こさかたくと

古坂拓斗 21歳 俳優をめざして日々がんばっているがなかなか

か芽がでないでいる

ほかりみゆう

帆刈海憂 26歳 拓斗の恋人 拓斗のことを陰日向かげひなたになり支えている

成瀬愛実

なるせまなみ

21歳 拓斗の幼なじみ

さいとうまさや

斉藤雅弥 21歳 拓斗の同級生 高3の時知り合った美咲と婚約中

やまもとみさき

山本美咲 21歳 雅弥の婚約者

関耕作・聡美（せきこうさく、さとみ）拓斗が高3の時バイトを

していた海の家 潮騒のオーナー

まえもとこうつ

前本康 30歳 海憂のよき相談者 海の家 潮騒のスタ

ッフで6歳の男の子のよきパパで海の男

やさかみつる

八坂充 38歳 拓斗をモデルとしてスカウトした人物

やまねまこと

山根誠 34歳 拓斗のマネージャー 仕事に厳しい反面 拓

斗の兄貴のような存在 俊敏マネージャーという噂も

いしもとまい

石本麻衣 23歳 女優 拓斗の恋人と噂されている

「うっさぶ」

「ほんと寒い、ここつてばでっかい建物ばっかで、ビル風つてのがとっても寒いんだもん！」

俺が去年の夏、海憂をあの海に迎えにいつてから半年が過ぎた。

「俺と一緒に東京へ行かないか・・・」

「俺と一緒に東京で暮らさないか？」

「いいの？本当にいいの？」

「あゝ、俺は海憂とずっと一緒にいたい・・・」

「拓斗、ありがとう・・・」

俺が21歳 海憂が26歳の夏、俺は彼女にそう言った。

それからほどなくして海憂はここ東京の街へ出てきた。

「石吹はこの時期でもこんなに寒くないもんなあゝ」

「そうだね、あつちはもう少し暖かいかも・・・」

「海憂？後悔してるか？」

「えっ？なにを？」

「俺とこんな都会のと真ん中で暮らして、お前にとっては窮屈きゆうくつなんじゃないかと思ってさ・・・」

「うゝん、そんなことは思ってないよ、だってわたし自身が決めたことだもん、それよりあなたとここで暮らせていけることが

今はとっても嬉しい・・・」

「そか・・・」

「お前はコテコテの海女うみおんなだから、海が恋人みたいなもんだったからな」

「うん、たしかにコテコテの海女うみおんなだったかも・・・」

「？」

「でも、その海に飲み込まれて浮かんでこれなかった人」海憂はそう言っで自分の指で自分のことをさして笑っていた。

そう、海憂はプロサーファーを目指して頑張っていた女だった。

プロサーファーのテスト当日、彼女の元彼が亡くなり、それをきっかけに彼女はプロの道へは進まないことを決め、

それから3年後、ここ東京まで出てきたのだった。

「はゝやつと着いたねゝ」

俺は海憂が上京してきたことをきっかけに彼女と一緒に暮らし始めてた。

俺と彼女が暮らすアパートはけっして贅沢な感じのところではなかったけれど、2人で暮らしていくにはさほどふじゅうでもなく

2人で一緒にいられるそんな空間がある、そんな佇まいの家だった。

俺は俳優なんかを目指していたけれど、なかなか芽がでず、毎日、悶々と過ごす日々が続いていた。

そんな時でも海憂は

「拓斗はぜつたいいい俳優さんになる！わたしが保証する！」なんていいながら俺を支えてくれていた。

俺にはたいした稼ぎもなかったからその分、海憂が働いていた。

「拓斗、ごはんだよ！」

「うん」

彼女は自分がどんなに忙しくてもどんなに疲れていても、いつも笑顔でうまいめしを作ってくれた。

彼女のその笑顔、しんそこ大切にしなきゃな、早く彼女を楽させてやらなきゃな・・・

「拓斗？なに考えてる？」俺が寝ているその横で海憂が聞いた。

「海憂の幸せ考えてた・・・」

「うそ・・・」

「うそなもんか、海憂をもっともつと幸せにする方法考えてた・・・」

「ばか！」

俺たちはたとえ苦しい生活の中でも互いを必要とし互いを求めあい互いの幸せを考えあっていた。

このまま、こんな穏やかな暮らしが続いていくもんだとそう思っていた。

「海憂・・・」

「うん？」

「愛しているよ・・・」

「うん・・・」

降り出した雨の音を聞きながら俺は海憂を抱いた。

彼女が壊れてしまうんじゃないかと思うくらい激しく彼女を抱いていた。

そうすることで俺自身が強くなれるんじゃないかとそんなことを思っていた。

page 17

嵐の前―(前書き)

海憂^{みゆう}第2章―

俺が22歳になった頃、少ばかりの役が付くようになっていた。ほんのちょい役でしかなかったけど・・・

俺が高校性だった頃、俺をモデルとしてスカウトしてくれた八坂さんのついで俺は@芸能事務所の一員になっていた。

その事務所の山根誠さんと知りあい、その人のコネもあって役が付いた。

俺はどこか腑に落ちなかったけど、このままなにもしないでこの俳優の世界で生きていくことは正直無理なことなんだろう・・・
そう無理やり自分を納得させてちょい役でも出させてもらおうと決心したんだ。

いつでもどこでも俺の中には海憂のことがあって、なんとしてでも彼女を幸せにしてやりたくて

彼女を安心させたくて無我夢中で頑張っていた。

「拓斗！」

「はい」山根さんに呼び止められた。

彼は俺がここ@芸能事務所に入ってからなにかとサポートしてくれている兄貴的な存在の人だ。

「今日のお前の演技よかったぞ！」

「けっこういい目になってきたな、役者てつのはどんな小さな役でも目で演技がでなきゃだめだ、その目、1つで

怒りや悲しみや喜びなんかをうまく表現できないと、大きくはなれ

ない」

「は……」

「最近のお前、なかなかいい目になってきたな、その調子で頑張ってくれよ！」

「はい！ありがとうございます」やった、やっと誉めてもらえた・・。

俺はやたらと嬉しくなった。

「お疲れさまです！」

「お～お疲れ～～～！」

俺は海憂に、今日、山根さんに誉められた事をいち早く報告したくて、海憂の待つ家までの道のりを走っていた。

「海憂～ただいま～！」

「拓斗、お帰り～どうしたの？そんなに息はずませて……」

「海憂、俺、今日、初めて山根さんに誉められた、目の演技がよくなってきたって！」

「ほんと？よかったじゃない！おめでとう！」

「海憂、海憂のおかげだよ……」

「そんなことはないよ、拓斗が一生懸命頑張ってるから、その結果が出てきたんだよ」

「海憂……」

「な、なに、拓斗？」

「ありがとう、愛してる……」

「なに、言ってるの、もう……」

「な？海憂……」

「なに？」

「こうして役者なんかやってる俺と今、お前の目の前にいる俺って、どっか違うのかな？」

こんなくだらない俺の質問に

「なに、ばかなこと言ってるの？どちらともあなたでしょ・・・」
と言って海憂が笑った。

彼女は俺のことなのにそれを自分のことのように喜んでくれた、絶対、絶対、彼女のこと大事にしよう、
今、以上に大事にしよう・・・彼女のこと必ず幸せにしてやるんだ・
・俺はあらためて決心した。

「海憂・・・」

俺たちは体を重ねてお互いの気持ちを確かめ合っていた。

これからさき、2人のあいだにいろんなことが巻き起こっていくなんてこと、これっぽっちも想像せずに・・・

page 18 - 甘ったれー (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

俺が23歳になった年、いろんな出来事があった。

でも、どんなに辛くても苦しくつてもいつも俺のそばには海憂がいてくれた。

ずっとずっと俺のことを支えてきてくれた。

そんな海憂に俺は思いつきり甘えていたんだ。

彼女の寂しさや辛さなんかなんにも考えずに・・・自分のことばかり押し通してきた。

「やってらんねーよ!!」

「なに言ってるんだ、拓斗！俳優の道ってのはそんなに甘いもんじゃない！」

「うるせーよ！」

「なんだと!!」この頃の俺は少しばかり名が売れてきたからって相当、高飛車になっていたんだと思う。

ここまでマネージャーをやってきてくれた山根さんにもたて突いていた。

「な、拓斗この道はな、ある程度の我慢も媚^{こび}も嫌だと思ふことさえ耐えてやっていくしかないんだよ、お前、この前もプロデューサーに文句付けたっていうじゃないか」

「だって、どうしても納得できなかったんで！」

「なに生意気な事言ってるやがる！」

去年の暮れにたまたま出させてもらえた単発ドラマで、俺は主人公を演じた。

その時の演技が高く評価され、来年の春からの連ドラで主役をまかせてもらえるところまで辿り着いていた。

そのドラマは青春物のドラマだったけど俺のキャラにはあまりあてはまるような役ではなかった。

「もう、いい、今日は帰れ！うちへ帰ってよく頭を冷やして来い！」
「あゝ帰ります！」

俺は頭をカッカさせながら家へといそいだ。

海憂がいるから、彼女になぐさめてもらいたかったから・・・

「ただいま・・・海憂？・・・居ないのか？」

いつもそこで待っていてくれる海憂がいない。あいつ、どこいったんだ？

その日、海憂は仕事が忙しかったらしく、なかなか帰ってこなかった。

だんだん、俺はイラついてきた。

「ただいま」

「あれ？拓斗、もう帰ってたの？仕事は？」

俺は彼女の声を聞く間もなく彼女をなかば強引に抱いた。

「拓斗、拓斗、ちょっとどうしたの？」

「・・・」

「ね、拓斗ってば、ちょっとちよつと・・・」

彼女は次第に抵抗しなくなり俺のなすがままになっていた。

俺は彼女にそうすることで自分の苛立ちや仕事に対する嫌なことすべて打ち消そうとしたんだ。

ひどいやつだな・・・俺ってやつは・・・

でも、海憂はけっしてそんな俺をせめようとはしなかった。

「ね？どうしたの？なにかあったの？」

「なんでもない・・・」

「そんなことないでしょ？」

俺は山根さんに言われたことすべてを彼女に話した。

「そう、そんなことがあったの・・・」

「でも、拓斗、あえて言うけど・・・」

「山根さんのいう事も正しいと思うよ、そりゃあ、あなたの演技に対する思いってすごく強いと思うけど

譲れない部分ってのもわかるけど、もっともっと、違う世界？うん、なんて言っていていいんだろ？演技の幅っていうの？

それが今以上に広げていけたなら、あなたはもっともっといい役者さんになると思うけどな・・・」

海憂のその言葉を聞いて俺は励まされていた。

「海憂・・・」

「うん？」

「さっきは、ごめん、悪かった、俺、どうかしてた、ごめん、ごめんな・・・」

「うん、いいよ、さーごはんでも食べようか！今日は拓斗の好物のオムライス海憂スペシャルを作るからね」

「まじで？・・・やったね！」

海憂はそう言ってキッチンへと入って行った。

彼女の背中を眺めながら

俺はどこまで海憂に甘えているんだ・・・。

もう少ししっかりしろ！

どうしようもなく甘ったれな俺に俺はつぶやいていた。

page 19 -初めての嘘- (前書き)

―海憂^{みゆう}第2章―

海憂の優しい励ましや言葉に支えられて俺は春の連ドラの撮影を続けていた。

当然、家に帰るのは遅くなり、家にはただ寝に帰るだけのそんな生活が続いていた。

そんな中でも海憂は俺のために夜遅くまで起きていてくれたり、温かいめしもきちんと用意してくれていた。

「はい、ここでクランクアップです！古坂さん、お疲れ様でした」

パチパチパチ~~~~大勢のスタッフの拍手が沸いた。

「お疲れ様です！」俺は1つの作品を作り上げたことに満足していた。

「よくやったな！拓斗！」

「はい、ありがとうございます」

「いい演技だったぞ！」山根さんもすごく喜んでくれた。

「だが、これからだぞ、ドラマってやつはいやおうなしても視聴率つてのが関わってくるからな」

「はい、わかっています」

「うん」

「じゃ、これで、俺、ありがとうございます！」そう言って俺が帰ろうとした時

「拓斗！」

「はい？」

「ちょっと紹介したい人がいるんだ」そう言って山根さんが手を差し伸べたその先に石本麻衣と言う女優さんが立っていた。

噂では聞いてはいたが、こんなところで会えるとは思っていなかった。すぐく美人で、かといつてきどっているような人ではなくどこかさっぱりと男っぽい感じの人だった。

まさか、この人が俺と海憂との間に波風を立てていく人とは、考えてもいなかった。

「古坂拓斗君？」

「は、はい・・・」俺は目茶苦茶に緊張していた。

「石本麻衣といいます。よろしくね・・・」

「はい、こちらこそ・・・」

「ね、お茶でも飲んでかない？」

「は～でも・・・」

「拓斗、せっかくのお誘いだ、行ってきたらどうだ」ためらっている俺に山根さんが言った。

「は、はい、じゃ、お言葉に甘えて・・・」

小さな裏切り行為だった。

その日は撮影が終わったら真っ先に家に帰って海憂とプチ打ち上げなんてするつもりでいたから。

拓斗、遅いな、今日は撮影、終わったらまっすぐ帰ってくるっていったのに・・・

せっかく張り切って作ったごちそうがさめちゃうじゃん・・・

）

携帯がなった 着信 たくと

「拓斗？どうしたの？ずいぶん遅いじゃない」

「ごめん、ちょっと撮影延びちゃって、帰るの遅くなりそうなんだ・

「・・・ごめんな！」ガチャ！
海曇に初めて嘘をついちゃったな・・・俺は少しばかりの罪悪感を
感じていた。

「・・・・・・・・」切れた・・・珍しく、あわててたな、拓斗・・・
しょうがない、1人で食べるとするか・・・

「いただきます」
「・・・・・・・・」

こんなにたくさんのごちそう、いったい誰のために腕振るって作っ
たんだろ？

まさか、自分1人で食べることになるとは思わなかった。

テーブルの上に並べられたたくさん料理を1人で食べるなんて・・・

・
わたしは拓斗が、一人前の俳優さんになるまでいろんなことを我慢
してきた。

彼のために彼と幸せになるために一生懸命ここまでやってきた。

わたしって彼のいつたいなんだっただろう？

目の前におかれたたくさん料理を眺めながら、今までの2人のこ
とを考えてみた。

ずっと我慢してきたすべてのものが大粒の涙となってわたしの頬を
濡らしていた。

その日、わたしは今までの気持ちを吐き出すように思いっきり声を
あげて思いっきり泣き叫んでいた。

なんで、こんな風にその時、思ったのか、なんでこんな風に泣いて
いるのか自分でもわからなくなっていた。

page 20 | 孤独と不安 | (前書き)

| 海憂^{みゆう}第2章 |

その年、放映された俺のドラマはなぜか評判になりその事をきっかけに俺はスターダムへのし上がって行った。

今年、一押の若手俳優 古坂拓斗（24歳）

なんてマスコミに騒ぎ立てられ俺は一人有頂天になっていた。

雑誌の取材やら、インタビューやら、写真撮りやらが続き、その時の俺には1日24時間なんて足りないくらいの忙しさだった。

当然のことのように俺は海憂の待つ部屋にはほとんど帰ることがなくなっていた。

帰るのではなく帰れない状態だった。

あの部屋で1人待つ海憂はいつたいどんな思いでいたんだろう？きつと心細くて寂しかったに違いない。

でも、俺には次から次へと仕事が入ってなかなか彼女のことを考える暇がなくなってしまうていた。

携帯をかけようと思ってもそばには山根さんや大勢のスタッフがいる。

分刻みのスケジュールの中、少しだけ時間が空いた。

「もしもし、海憂？」

「拓斗？こんな時間にどうしたの？」

「うん、ちょっとだけ時間が空いたから」

「そう・・・」

「拓斗、今ね、あなたのドラマ見ていたよ、目での演技がとってもよくて、こっちまでせつなくなっちゃった」

「まじ？」

「うん」俺は海憂に誉められるとなんだか嬉しくなってこの仕事を

ここまで続けてきてよかったな、なんて思ったりした。

「ね、拓斗？」

「うん？」

「もう何日あなたと顔合わせてないんだろ？」

「なんだか、もう、わたし疲れてきちゃったな・・・」いつも強気な海憂が珍しく弱音を吐いた。

「なに、言ってたんだ、もう少し落ち着いたら必ず海憂のところに帰るから・・・」

「うん・・・わかった・・・」

「古坂くん、もうすぐ次の撮り時間！」

「はい、わかりました！じゃ海憂また電話する」ガチャ！「・・・」

拓斗はわたしをどんどん置き去りにして、手の届かないところに行っちゃったのかな？

もう、ここには帰って来てはくれないのかな？

もう、昔のように2人で抱き合うこともごはんを食べることもなくなってしまうのかな？

わたしは、一人、孤独と不安の中で泣き出してしまった。こら！泣き虫！海憂！いつからそんなに弱くなっちゃったの？

もう1人のわたしが怒っているように聞こえた。

わたしは、もうすぐ29歳になる。世間的に言えば結婚適齢期だ。そんな気持ちがありますわたしを孤独にさせていった。

海憂が寂しい思いをしていることなんて知らずに俺は仕事にかこつけ、女優石本麻衣とあししげに会っていた。

彼女は俺より2つ年上の26歳、いまやおしもおされる若手の大女優さんだ。

彼女が俺に気があるのはうすうす感づいてはいたけれど、あえてそ

れを否定する理由りゆうなどなく

ただ暇な時にお茶を飲みにいったり 居酒屋に酒を飲みにいったり、友達みたいな関係が続いていた。

何度か会っているうちに彼女からお誘い？のようなこともあったけど、俺は最終的に彼女に気を許してはいなかった。

俺の中にはいつもいつだって海憂のことがあったから。

少しばかり名が売れて、安定した収入が入ってきた今、俺は海憂との結婚を考え初めていた。

page 21 - 心の隙間 - (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

「ただいま〜!!」

「海憂、今、帰ったぞ〜い!」

「拓斗〜おかえり〜」俺はひさびさに海憂の待つ家に帰っていた。

「海憂〜」

「拓斗!」

「なかなか帰ってこれなくてごめんな・・・」

「うん、大丈夫だよ、今、ここに拓斗がいるから大丈夫」

海憂はいつものように元気にふるまっていたけれどなんだか少し痩せたように見えた。

「あゝ風呂、入っていい?」

「うん、沸かしてあるから入れるよ〜」

「おゝサンキュ!」

<ちゅ!>

俺は海憂のおでこに軽くキスをした。

拓斗が久々に帰ってきたのになんだかわたしはちょっとせつなくなつた。

それは彼の洋服にしみこんだきつい香水の香りを感じたからだ。

売れっ子になればなっていくほど外で女の人と会う機会なんていくらでもあるんだろうけど

その現実を感じてしまったわたしは悲しくなってしまった。

彼と一緒にいるはずなのに、やっぱり孤独を感じてしまう。

彼が俳優の道を目指すとしたときから、こんな時がいつ

かくるんじゃないかと覚悟は決めていたけれど・・・

わたしは欲が深い人間なんだろうか？彼がわたしの元に帰ってきたというのにそれ以上のなにをのぞんでいるんだろ？

わたしは、食事の支度をしながらそんなことを考えていた。

「あゝあちゝ久々にいい風呂だった」

「さっぱりした？」

「あゝ」

「海憂・・・」

「うん？」

「こつちへおいで・・・」

「うん・・・」

俺は久々に感じる海憂の肌のぬくもりを確かめたくてそのまま、彼女を抱いた。

こうして彼に抱かれててもどこか物悲しいのはなぜ？

心の隙間を感じてしまうのはなぜ？

拓斗、あなたはちゃんとわたしを愛してくれてるの？

わたしはあなたをちゃんと見ていられてるのかな・・・？

「少し痩せた？」

「えゝそうかな？もしかしたら痩せたかもね」

「よけい胸がなくなちゃったじゃないか・・・」

「よけい、ってなにによ？ひどいなあ、拓斗ってばなんてこと言うのよ・・・」

そんないつもと変わらずに軽口を叩く拓斗を感じてわたしはさっきまでの不安や孤独は帳消しにしようと思った。

でも、そんな日からほどなくしてその思いを裏切るかのような出来事がおこったんだ。

ひさびさに海憂の元へ帰ってからしばらくして俺のところに映画の出演交渉がきた。

「いい話じゃないか、拓斗」山根さんは喜んでいた。

「でも、俺、こういう役はちよつとできませんよ」

「なに、言つてんだ、いろんな役をこなして、お前はもっともっと大きくならなきゃ、いけないだろ？」

「・・・・・・・・」

この間、海憂の元へ帰ってから俺は痩せてしまった海憂をみて、彼女をもう待たせるのはごめんだ、なるべく早く彼女と結婚をしたいとそう思っていた。

今の俺がここにこうしてられるのはすべて彼女、海憂のおかげだから、海憂が居なければ、俺はここまでやってこれなかったから。

彼女に今まで苦労させた分、今度は俺が彼女を守らなければ、彼女を幸せにしてやらなければいけないと心底思えたから。

ここで映画の話なんかきたらまた1年近く彼女を待たせなければならなくなる。そんなことは絶対嫌だ、ありえない。

俺は映画の話を断ろうとそう決めていた。

「拓斗！」

「はい？」

「お前、なに考えてるんだ、映画の話、断ったそうじゃないか」山根さんは俺をどなりつけた。

「いいか、ドタキャンみたいな事をしてみる、すぐに仕事、ほされるぞ！」

「別にいいです」

「なに、勝手なことを言っている、お前のマネージャーは俺だ、お前に勝手なことはさせん！」

そう言って、山根さんは楽屋を出て行った。

その日は、仕事が早く終わった。俺は足早に家に帰った。

「ただいま〜！」

「あ〜おかえり」

居間のテーブルの上になんとか豪華な白い手紙がポンっと置いてあった。

——古坂拓斗、帆苅海憂 様——

そこにはかわいらしい文字が並んでいた。

差出人をみると、——斉藤雅弥、山本美咲——

そう、手紙をよこしたその人物は俺の高校の時の同級生っていうか、悪友の雅弥からの手紙だった。

「雅弥君と、美咲ちゃん、結婚するんだって・・・」

「へ〜そうか、もう結婚か〜、まさかあの2人が結婚までたどりつくとは思わなかったなあ〜」

「そう？わたしは、初めて2人を見たとき、もしかしたらって思ったけどな〜」

「へ〜海憂、すごいね〜、お前は予言者か？」

「女の勘よ、女の勘！」

「へ〜そうですか〜、じゃ、海憂、俺が今、お前に何を言おうとしているかわかる？」

「なに？藪からぼくに・・・」俺は海憂の肩を抱き、彼女の目を見つめ——結婚しよう——と言うつもりだった。

その言葉を海憂に言いかけた時、居間でかかっていたテレビが急にざわめき始めた。

その内容を見て俺は愕然とした。

スクープ！ 新人俳優 古坂拓斗（24歳）の恋人は石本麻衣（26歳）だった！！

石本麻衣さんと古坂拓斗さん、深夜の密会か？2人がホテルから出てきたところをキャッチ！

確かにこの日は俺もけっこう酒を飲んでいたし、麻衣もかなり酔っていた。

情けない話、俺は記憶がなくなりそうになっていた。

フラフラつと歩いた先にホテルの入り口だけは見えていた。「やべえ・・・」そう思っただけで歩き出そうとした俺の腕を彼女は引き寄せ俺の唇に自らの唇を重ねてきた。「なにするんですか？」「いいじゃない、別に・・・あなたもその気だったんでしょ？」

「何を言ってるんです・・・俺、帰ります」「ちよつと・・・待ちなさいよ！」「

<バチバチ>

・・・一瞬俺の目の前をかなり明るい光が走った。

それから俺はどこをどう歩いたのか、気がついたら自分の家の前にいた。

なにもなかった振りをして海憂の元へと帰っていたんだ・・・。

最低だよな、俺ってやつは・・・。

俺は海憂の顔を見ていた。海憂は怒りとも悲しみともとれる顔で今すぐにでも泣き出しそうだ。

「これってどういうこと？仕事って言ってこの人と会っていたの？拓斗、ね、どうなの？」「

「海憂、これはまったくの誤解だ、確かに彼女とはお茶を飲んだりお酒を飲みについていたりはしたけれど・・・」

「ほんと？でも、信じられない・・・」

「海憂・・・」俺は彼女を落ち着かせようと思い抱きしめようとした。

でも、「いや、こんなの嫌だよ、拓斗、ぜったい嫌だ！」

そう言つて彼女は玄関の外へと飛び出して行つた。

俺はあわてて彼女のあとを追つた。

「海憂？海憂？」家の近くの公園に彼女は1人で立っていた。

「拓斗、なんだかわたしあなたに対してすごく裏切られた気持ちがいつぱいで、頭に来て外まで飛び出してはみたけれど、けっきょく、わたしにはあなたのそばにいるほかないんだって・・・」

「海憂、ごめん・・・俺に隙があつたから、お前に余計な心配させた、ごめん」

「拓斗・・・あなたのこと信じていい？」

そう聞く海憂の言葉をよそに俺は自分がしてしまった愚かなことを後悔していた。

「海憂にその気持ちがあるのなら、俺はそれでそれだけでいい・・・ほんとうにごめん・・・」

「寒いから、家に帰ろう・・・な、海憂」

「うん・・・」

その時の俺にはこの位の言葉しか思い浮かばなかった。

後でわかつた事だけど、この出来事は石本麻衣が個人的に俺を落としてくれようとして仕組んだ罠だった。

彼女はそれからしばらくして引退へと追いやられてしまった。

彼女は、俺に海憂という恋人がいることにつすうす気づいていて

海憂に対するジェラシーが元でこんなことをしでかしたんだと聞いた。

でも最終的に悪いのは俺だったんだよな・・・

でもこのことがきっかけで俺と海憂の関係がマスコミに取りざたされるようにまでなってしまった。

page 23 - 「別れる！」 - (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

海憂と家に帰った夜、俺は、石本麻衣とのいきさつを包み隠さず海憂に伝えた。

きっかけはどうであれ彼女とキスをしてしまったことも彼女と頻繁に会っていたことも・・・。

それでも海憂はもう1度あなたのこと、信じることに決めたと言ってくれた。

俺はその時思っただ・・・海憂には勝てないな・・・この女に真剣にやられたと・・・。

そんな出来事があってもしばらくは静かな日々が続いていた。

俺といえば、映画のドタキャン、石本麻衣との噂、俺と海憂との関係は？なんて噂が引き金になっていくらか人気が落ちていた。

でも、俺はあせることなく、それでもなお、俺を必要としてくれるスタッフや番組プロデューサーとともにマイペースで

仕事をこなしていた。

いつしか海憂も落ち着いて、なんだかゆったりとした時間を過ごしていた。

「なんだか、こんな時間の流れ いいね・・・」海憂がポツリと言った。

俺も早くきちんとしなけりゃ～な～あんなことがあった後、海憂に申し訳ないと思う気持ちがあるがゆえ、あの時に言いかけた

- 結婚しよう - というその言葉をなかなか、言い出だせずにした。

「ね、拓斗？」

「うん？」

「もしも、もしもあなたとわたしの間に子供が出来たら、名前、なんてつける？」

「えゝ、俺はまだ子供のことは考えてもいないなあゝ」

「まさか、出来たのか？海憂？」俺は正直あせった、いくら多少の仕事があっても子供を養っていくほどの稼ぎは今の俺にはない。

「もしも、もしもの話よ・・・」

「そうか・・・」

「わたしはね、もし男の子が出来たらあなたの斗とわたしの海をたして海斗かいとってつきたいの、でね、女の子だったら

夏海なつみってつきたいんだ、夏の海で拓斗に出会ったから・・・単純かな？」

「いいんじゃないの、海憂らしくって」

「ばかにしてるんでしょ？」

「してないって！」子供か、海憂には照れくさくって言えなかったけど、俺も彼女と俺の子供がほしいなって思った時があった。

でも、今は・・・もう少し稼いで海憂にはほんとうに楽な暮らしをさせてやりたいと思うっていたから

そのことはあえて言わないでいた。でも、それって都合のいい言い訳だったのかもしれない。

そんな出来事から半年位経った頃、海憂や周りの人たちの助けもあって減ってしまった仕事の量もだいぶ増えてきていた。

「拓斗が地道に頑張った結果だよ・・・よかったね・・・」海憂はいつもいつだって俺のことをそうやって励ましてくれていた。

今度こそ海憂に結婚を申し込もう・・・俺はそう誓っていた。

「おはよゝございます」

「おゝおはよゝ」

「ざいまゝす！」

「拓斗！」

「はい、山根さん、なんですか？」

「お前、あの彼女とのことはどうなっているんだ？」

「彼女って・・・？」

「帆苅海憂さんのことだよ」俺はあまりに唐突に山根さんに海憂の名前を言われたのでドキリとした。

「俺もうすうすは感じてはいた、石本麻衣のことがあつたあたりから気が付いてはいたんだが・・・」

「・・・」

「俺は彼女と結婚したいと思っています」

「・・・」

山根さんはしばらく黙っていた。そして俺にこう言つたんだ。

「拓斗、お前の売りつてなんだか知ってるか？」

「えゝまあゝ、でもあれつてなんか変すよね・・・」

「なにを言つてる、お前はファンにとつては自分の恋人、拓斗はわたしだけのものっていうイメージで売ってきたんじゃないか？」

「一度仕事をほされて、まわりのスタッフやお前のファンみんなに支えられてまたここまでやってこれたんじゃないのか？」

「それはそうだと思います・・・」

本当はそうじゃない、俺がここまでやってこれたのはなにをかくそう、海憂のおかげなんだ。

彼女がいつでも俺の陰日向になりこんな俺を支えてきてくれていたんだ。

俺がそう言いかけようとした時、山根さんが言った。

「彼女と別れる・・・」とただ一言だけ。

俺の頭の中が真っ白になっていった。

page 24 - 新しい命―（前書き）

―海憂^{みゆう}第2章―

なんか、最近、体の調子が悪いな。

だるくってだるくってしょうがないや、胃もムカムカしてる感じがするし・・・

近いうちにお医者さんにもいつてこようかな・・・。

今日、仕事がひさびさに休みだったわたしは、部屋の中を片付けていた。

「う・・・、気持ちわるい・・・」わたしはトイレにかけこんだ。

「・・・もしかして、妊娠？」

そういえば・・・わたしは自分の手帳を調べてみた。

「・・・」2週間、遅れてるな・・・でも、まさかね・・・疲れてるのかもしれないな。

でも、病院には行っておいたほうがいいかな？

わたしは、家の用事をさっさとすませて、病院へとむかっていた。

「帆苅さ〜ん、帆苅海蔓さん〜」

「はい」わたしは、診察室で先生が来るのを落ち着かない感じで待っていた。

「お待ちせしたわね・・・」年のころなら50代半ば位の女医さんがわたしの前に座った。

「帆苅さん、おめでと〜うございます、あなた妊娠してるわよ」

「えっ？」

「吐き気がするのはつわりのせいね、今、ちょうど妊娠11週目、3ヶ月つてとこね・・・」

「今、超音波の画像をお見せするわね」先生が1枚の写真を見せた。
「はい、ここがお尻、ここが心臓、で、ここが頭よ」わたしはその

モノクロの写真に見入っていた。

拓斗とわたしの赤ちゃん？信じられない・・・と思うと同時にいいようのない嬉しさがこみ上げてきて、わたしは泣きそうになった。「赤ちゃんは元気なんだけど、あなた、ちよつと疲れてない？無理しているんじゃないの？」

たしかに、こここのところ仕事が忙しくって疲れはたまっていた。彼の仕事ももう少し軌道にのるまではと思っていたから少々無理はしていたかも・・・

「お母さんが元気にしてないと赤ちゃんも元気に育たないわよ」

「はい、わかりました」

「あなた、まだ結婚されてないの？」

「はい」きつい一言だった。結婚か・・・

「もし、産んであげることが出来ないならなるべく早く相談にきてくださいね」

「はい・・・」

「じゃ、お大事にね、後は母子手帳を受付でもらって行ってね」

「はい」

「なるべく静養して体力をつけておくように・・・」

「はい、ありがとうございました」

病院を出てからの帰り道、わたしはただひたすら嬉しくって嬉しくって

いつもは立ち寄りもしないベビー服屋さんなんかに着いてみた。でも、家に一步一步近づくとつれ不安になってしまった。

拓斗は赤ちゃんのこと喜んでくれるだろうか？

産んでもいいよって言うてくれるだろうか、彼になんて言ったらいいんだろう？

女というものはそこに自分のもう1つの命を宿した時、あたりまえのように母親になる決心をするもんなんだな。

彼がたとえ反対しても、このことでもし、もし彼がわたしから離れていってしまうようなことがあっても

わたしはこの子を絶対に守ってみせる。その時、わたしは強くそう思っていた。

家の前に着いたとき、どこかで見覚えのある車が止まっていた。

「だれ？」

「帆苅海憂さんですか？」

「はい、帆苅ですが・・・」

「僕は、古坂拓斗のマネージャーをまかされております、山根と申します」

彼はそういつて名刺を1枚差し出した。

「あ、いつも拓斗が、いや古坂くんがお世話になっております」

「唐突ですが、今日はあなたに頼みがあつてここまでやってまいりました」

ひどく紳士的なその人はどこかきつい目をしてわたしの顔をじろじろと見ていた。

「こんなところではなんですから、うちまで上がってください」わたしの声は少しうわずっていた。

「はい、お茶でもどうぞ・・・」

「あ、おかまいなく・・・」

「あの、言いづらいのですが・・・」山根さんはわたしが出したお茶をゴクリと飲みほした。

それから、彼が言った言葉にわたしは愕然がくぜんとした。

「拓斗と、古坂と別れてもらえませんか・・・」

「えっ？なんでですか？」わたしは予想外の言葉にショックを隠しきれないでいた。でも、なるだけ冷静になろうと思ってお腹の上をそつとさすった。わたしにはこの子がいる、この子がいるんだ。――

生懸命、自分にそう言い聞かせていた。

「古坂は、今ようやっと世間に認められてきた

今の彼には彼女とか、女の影とかそういったものは一切感じさせてはいけない時期なんです。一度落ちかけた人気をやっとここまで挽回してきたんですから・・・ここで、またあらたなスキャンダルが出るという事は彼にとってはもう致命的だ。

そんなことになったら今まで彼を支えてきた多くの人間は大変なことになるてしまう。

申し訳ないのですが、こちらの事情も理解していただきたい」それだけ言つて山根さんは帰つて行つた。

わたしはどうすればいいのか、どうしたらいいのか、何も考えが浮かばず、放心状態のまま、暗くなつた部屋の中にいた。

どの位の時間が経つたんだろう？もうすぐ拓斗が帰ってくる時間だ。ごはんの用意をしなくちゃ・・・

「ただいま」

「あゝおかえり」わたしはつとめて明るく元氣にふるまつた。

「海憂、今日は、いい仕事ができただよ・・・」

拓斗が話しかけてきたけれどその時、彼がなにを言っていたのかなんて覚えていなかった。

海憂、なんか元氣ないな？どうしたんだろ？

俺は昼間、山根さんに言われたことは海憂には言わないと決めていた。

俺は、事務所を辞めさせられても俳優の世界から追放されたとしても彼女と結婚しよう決めていた。

そのことで引退なんてことになつてもかまわないと思つていた。

海憂と2人で石吹に帰つて、そこで彼女とずっと一緒に暮らして行こうとそう堅く決めていた。

俺がもうすぐ25歳、海曇がもうすぐ30歳をむかえる頃だった。

page 25 - 悲しい決断Ⅰ（前書き）

Ⅰ 海憂^{みゆう}第2章Ⅰ

チチチチチ・・・

俺は騒がしい鳥の声で目がさめた。
隣で海憂が寝ている。

そんな、彼女の寝顔を眺めていた。

「海憂・・・」

「うん？」

半分寝ぼけ顔の彼女の唇に俺はキスをした。

「海憂・・・海憂・・・」俺は彼女を軽く抱き寄せて彼女の胸に自分の顔を埋めた。

細く華奢きゃしゃな彼女の体は綺麗だった。俺はたまらなくなつて彼女を抱いた。

ゆっくり優しく、今までにないくらい彼女のことを抱いていた。

「海憂・・・」「うん？」

「・・・結婚しないか？」

「えっ？」

「俺と結婚してくれ・・・」

「拓斗・・・」「本当に？」

「あゝまじでだよ・・・」

「あ、ありがとう・・・」

「拓斗・・・」

「うん？」

「少し、少し考えさせてくれる？」

「あ・・・わかった、いい返事待ってる」

「ありがとう・・・」

海憂からの答えがとっさに出なかったことが俺はちょっと気になった。

結婚か・・・

思いがけない言葉だった。そりゃ、拓斗とこのまま結婚出来るなんてすごく嬉しいことなただけ。

ずっと、ずっとわたしが待っていた言葉でもあるんだけど・・・でも、これからって時の彼をわたしが独占していいのかな？

この子のためにも父親が必要なのもかもしれないけれど・・・どうしたらいいんだろう？

これからの拓斗のことを考えるとわたしなんか彼のおそばに居てはいけないんじゃないかとも思う。

彼をこんなに好きなのにね・・・彼の子供もいるのにね・・・わたしの気持ちは複雑だった。

俺が海憂にプロポーズしてから1週間、俺は与えられた仕事をこなし海憂はいつものように仕事へ出かけ

普段となんら変わりのない生活を過ごしていた。

ただ海憂は悩み事でもあるのか、なんとなく元気がなかった。1人で考え込んでいる時間が多くなっていた。

彼のプロポーズを受けてからそろそろ1週間が経つ。

いろいろいろいろ悩んだけれど、これからの彼のためにわたしは彼の前から消えていく事を決めた。

彼と離れるのは身を引き裂かれるほど辛いことなのはわかっているでも、わたしにはこの子がいる。この子が一緒ならどんなに辛くても寂しくても悲しくてもきつと生きていける。

きつと強くなっていける・・・。

「海憂？この間の返事そろそろ聞かせてくれないか？」俺は彼女に聞いた。

「・・・・・・・・」

「拓斗、ごめんね、わたしあなたとは・・・結婚できない・・・」

「えっ？」海憂の意外な言葉におれはとてつもなく驚いた。

「海憂？なんで？なんでだよ・・・？」

「拓斗・・・、あなたは今が一番大事なとき、その若さでこんな年上のわたしなんかと結婚したら、

また1年前と同じようになってしまう。

あの時、あなたは強がってはいたけれどどこか辛そうだった。わたしはそんなあなたをそばで見ているのがつらかった。怖かった。このまま、あなたがダメになってしまうんじゃないかとすごく不安だった。

せつかくここまでのぼりつめたあなたの人生をわたしなんかのことでなくしてほしくないから

だから、わたしは拓斗とは結婚できない・・・ごめん、ごめんね・・・」海憂は俺の前で泣き崩れた。

「海憂、海憂はそれでいいのかよ？俺のこと愛してくれてるんじゃないのか？俺たちの関係ってそんなに軽いもんだったのか？」海憂はただ泣いていた。

「海憂、もう1度考え直してくれないか？」

「拓斗、拓斗、わたしはあなたのことずっとずっと見てこれた、あなたのそばにずっと居られた、愛して愛されて、わたし幸せだったよ」

「だったら答えは出てるじゃないか・・・」

「でもね、だめなんだよ、わたしがあなたのそばにいちやだめなんだよ・・・」それだけ言って海憂は寝室へと入っていった。

俺は彼女の寝ているそばに座り込み、彼女の寝顔を眺めていた。ただ茫然と彼女の顔を見ていた。

そしてそれがこの部屋で彼女の顔を見る最後の日になったんだ。

海憂の細い指が俺の髪をそつとなでる・・・
海憂の小さな唇が俺の唇に触れる・・・
次の瞬間、海憂が泣いている・・・
どうした？海憂？海憂・・・？

ピピピピ・・・ピピピピ・・・

「！？」夢か・・・やな夢だったなあ」

今何時頃だ？俺はそばにある時計を止めた。

「10時15分？・・・」

「やべー起きなきゃ」俺はあわてて起き上がった。

今日は、たしか11時半から打ち合わせだと山根さんが言っていたな。

「おい、海憂？なんで起こしてくれなかったのさ」海憂？「そこに彼女の姿はなかった。

テーブルの上に一通の手紙が置いてあった。

* 拓斗へ

おはよ、拓斗。朝ごはんは用意してあります。ちゃんと食べていくんだぞ・・・

拓斗、今までの7年間、いろんなたくさんの出来事があったけれどどれも素敵な思い出でいっぱいです。

あなたと出会えてわたしは幸せだったよ。

7年前の夏の日、あなたと出会いあなたと恋をしてあなたとここまですぐに過ごせてくれたこと

今のわたしには全部全部、宝物です。

こんな形であなたとさよならすること許してね・・・。

あなたはあなたの思うように生きてほしい・・・。

あなたがもつともつと素敵な俳優さんになれること、遠くで見守っ

ています。

拓斗、今までこんなわたしのそばにいてくれてどうもありがとう。
元気だね。わたしはきつとあなたのこと一生忘れません。ずっとず
っと愛しているよ。

- 海憂 - *

俺は目の前が真っ暗になった。さっきのは夢じゃなかったのか？ま
さか・・・「海憂！！」

俺は気を取り直して、海憂を追いかけようと外に飛び出そうとして
いた。

<ピリピリ〜ピリピリ〜>

携帯の音が鳴った。

「もしもし？海憂？海憂か？」

「拓斗？」その声は海憂ではなく山根さんの声だった。

「山根さん・・・」

「今日の打ち合わせ時間、相手の都合で繰り上がって10時30分
になったからな。早く支度してでて来いよ！」ガチャ！
なんでこんな時に・・・

海憂を追いかけてもくれないのかよ。俺はその事がもどかしく
今の自分の立場を恨んだ。

もつともつと俺がでかくなつてればこんなことになんかならなかつ
たはずなのに・・・

海憂、いったいお前はどこに行ってしまったんだ？

あの手紙を海憂はどんな気持ちで書いていたんだろう・・・。

「と、いう事だ・・・わかったか？拓斗？」
「・・・」

「おい！何を考えている？」山根さんのどなり声でおれはハツとし

た。

「は？なんでしょうか？」

「お前なあゝ・・・」

「だから、1週間後、お前はロケに行くんだよ」

「ロケ？」

「そうだよ、今度のお前の映画、その企画でアメリカにロケに行くんだ」

「アメリカ？」

「そうだ、むこう1年間、みっちり役者修行をしつつ、アメリカでロケをしていい映画を撮ってくるんだ」

「えっ？」

「有無は言わさんぞ、これは前々からお前にあった仕事だったんだからな」

そう、それは1年前、俺がドタキャンした映画の企画だった。

その映画の監督さんが俺のことをどうしても起用したいとずっと考えてくれていた。

俺は海憂のことがあったから映画の出演は断っていた。

海憂を失ってしまった今、アメリカに行つて勉強するなんていい機会かもしれない、海憂のこと、忘れられるかもしれない・・・
そう思った俺は、その映画の出演と役者修行を受けることにした。

アメリカにいくまでの1週間、ずっと海憂の携帯に電話してみても答えはいつも一緒「おかけになった電話番号は・・・」だった。

俺はいろんなことを考えた。海憂がどうして俺に別れを告げたのか、どうして彼女のこと

引き止めることが出来なかったのか、さまざまな思いが交錯するなか、俺は部屋を見回してみた。

彼女がいらないその空間はいじょうなほど広く感じられ、俺の心は張

り裂けそうになった。

海憂がここにいない、その現実をたたきつかされた気がした。彼女を無理して忘れることなんてできやしない。

このロケから帰国したら、俺はぜったい彼女を探し出して、そしてもう1回プロポーズをするんだ。

今度こそ、今度こそ、絶対に彼女と一緒にやってやる！たとえ世間の人を敵にかえてまでしても・・・

彼女が居なくなったその部屋で俺はこの道からきっぱり引退しようと思うっていた。

page 27 - 会いたいー (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

拓斗のいる東京からここ石吹島に帰ってきてから1週間が経った。その間に彼からの連絡は毎日のようにわたしの元へと届いていた。わたしは何度もその電話を取ろうと思った。

でももしその電話を取って彼の声を聞いてしまったらこの子を1人で産んで1人で立派に育てようという決心がにぶってしまう。

彼にまた負担をかけることになってしまう。

1週間ののち、電話は2度となることはなかった。これで本当に彼とのことは終わってしまうんだろうな・・・

そう考えたら涙があふれた。

「赤ちゃん、ごめん、ごめんね、泣き虫ママで・・・」

いつしか時間はゆっくりと流れ彼との別れから半年ほど経っていた。わたしはその日大きくなったお腹をかかえ、海岸沿いをゆっくり散歩していた。

近くのコンビニに立ち寄った時、ふと目にした雑誌に彼のことを伝える記事が載っていた。

古坂拓斗 映画撮影快調に進む！

ここのところ体調をくずしていたわたしはその記事に堂々と映っている笑顔の彼の写真を見て嬉しかった。

「拓斗、頑張ってるんだな・・・わたしも頑張らなきゃいけないな・・・」そう思ったとたん涙が出た。

拓斗会いたいな・・・会いたいよ・・・拓斗・・・
なにをメソメソしてるんだろ・・・赤ちゃんに笑われちゃうよね・・・。

海憂、もうひと踏ん張りしなきゃね・・・。

拓斗が頑張ってるんだから、わたしもこの子を守るため頑張らなきゃ……。

それからほどなくしてわたしは子供を産んだ。

身長48センチ 体重2800gの男の子だった。

わたしはその子に海斗かいとと名づけた。

最初のうちはなにがなんだかわからずただもう無我夢中で彼を育てていた。

夜泣きをしたりきゆうに熱をだしたり、寝る暇なんかないほどにただただ夢中になって……。

わたしと拓斗の間にできた、海斗……愛おしくてしかたがない……。あなたはわたしの宝物だよ。

なにがあってもあなたのことはママが守ってみせるからね……

海斗が寝返りをうち、そして這い這いをし、つかまり立ちをし、かたことの言葉を話すようになり

少しずつ大きくなっていく姿をみてわたしはこの上なく幸せを感じていた。

この子を守ってきたよかった、この子を育てられてよかった、わたしは海斗さえいればなんにもいらない。

海斗が元気でわたしのそばにいてくれるだけで、それだけでいい。

わたしは海斗に育てられているんだな、彼がいるから強い気持ちでいられるんだ……

「海斗、お散歩にいつてみよう！」

「あい」かわいらしい手がわたしの手をつかむ。

わたしは海斗の真っ赤なかわいいほっぺたにキスをして海斗と一緒に海へ散歩に出かけた。

「まあまゝまあまゝ」海斗がわたしの手をにぎりながらよちよちと歩き出した。

海斗、大好きだよ！

わたしは小さな海斗の手を握り、拓斗との思い出がいっぱいの海岸を歩いていた。

「海斗、ここはね、ママとあなたのパパとの思い出がいっぱいっぱい詰まっているところなんだよ」

「？」 幼い海斗はちょこんと首をかしげて不思議そうにしていた。

page 28 - 石吹島へー（前書き）

ー海憂^{みゆう}第2章ー

海憂と別れて1年間、俺は役者修行を兼ねながらアメリカで映画のロケをしていた。

こっちはいろんなものやいろんなことがすべて日本と違いスケールがでかった。

俺は、毎日毎日、驚きの連続だった。自分という人間がちっぽけに見えていた。

いろんな風景を見て、いろんなことを学んで、俺は俺なりに成長していったんだと思う。

周りのスタッフの絶大なる協力を得て1年間の海外ロケと武者修行？は無事終了した。

「拓斗、お疲れ〜」

「よく、頑張ったな!」

「山根さん・・・ありがとうございます」

「どうなることかと思っていたが、たいしたもんだったぞ!」

「はい、ありがとうございます」

「明日から2週間OFFを取ってある、ゆっくり休んで、充電しておけ!」

「はい、わかりました」

「じゃ、お疲れさん!」山根さんは珍しく上機嫌だった。

「は〜疲れた〜」俺は空港からまっすぐ家へと帰った。

明かりが灯っていないその部屋はいつもと変わらずそこにあった。

「1年か〜、長かったような短かったような・・・」

疲れてきているはずの俺はその部屋に入ったとたん疲れが取れるような錯覚を覚えた。

そこは海憂と別れて1年以上は経っている場所なのに・・・

海憂が残していった様々なもの達が俺のことを優しく迎えてくれた気がしたからだったのかもしれない。

海憂、今頃お前はどこでどう暮らしているんだ？元気でやっているのか？石吹島に帰ったのか？

俺はなんだかせつなくなってみつともない位の勢いで泣き出してしまった。

海憂・・・海憂・・・俺は彼女の名前をなんとも呼び返していた。

！ピンポン！

小一時間ほど経った頃だろうか？玄関のチャイムが鳴った。

「だれ？」俺はぶっくらばうにドアを開けた。

「おゝ！」

「ま、雅弥〜」

「こんにちは〜」

「美咲ちゃん？」

「拓斗、元気だったか？」そこには雅弥と美咲ちゃんが立っていた。

「久しぶりだな〜 さ、上がって上がって、なんにもないけどさ・・・」

「おじやましな〜す！」

雅弥と美咲ちゃんは2年前に結婚していた。美咲ちゃんのお腹が大きくなっていた。

「雅弥？ひよつとして？」

「あゝもうすぐ産まれるんだよ」

「そか、おめでとうな、やったな雅弥、お前もとうとう親父になるのか・・・」

「照れるから、そういうこと言うなって！」

2人との再会はなんだか楽しくあつという間に時間が過ぎていった。

「拓斗・・・」

「うん？」

「実はな・・・」

「なにあらたまつて・・・」

「うん、おやつさんがおやつさんが・・・」

「おやつさんが、どうかしたのか？」

俺はショックだった。

俺が高3の夏休みにバイトに行っていた海の家 潮騒のオーナーだったおやつさんが先月亡くなったという知らせだったからだ。

海憂と出会うきっかけになったあの海で元気に働いていたおやつさんの大きな笑い声が聞こえてきそうに俺は辛くなった。

「明後日俺は美咲とおやつさんのところへ行こうと思っあいつているんだが、お前、どうするよ？一緒に行くか？」

俺はしばらく考えていた。あの海へ行くということはいやおうなしでも海憂との思い出が甦よみがえってくるだろう。

おやつさんの死に加え、海憂との思い出の場所に行くことは、俺には辛いことだ。

「悪い・・・俺は多分行けないと思う・・・」

「そっか、仕事なのか？」

「うん、まあ・・・」

「わかった、じゃ、俺たち2人で行って来るから・・・」

「あゝ、女将さんにもよろしく伝えておいてくれよ・・・」

「はいよ」雅弥たちは帰って行った。

おやつさん、おやつさん、なんで、なんで・・・俺はふたたび泣き出してしまった。

かつこ悪いよな俺・・・情けない・・・海憂がいたらそう言っ
て俺の尻をけつとばしていただろう・・・

そんなことを想像してみたらなんだかふいにおかしくなってきた

しぶりに俺は笑い出していた。

きつとたぶん、海憂が出て行った先は石吹島なんだろうと思う。

俺は1年前のあの日からアメリカに行くまでの1週間、彼女の居る場所へ行こうと思えば行けたんだろう・・・。

でもそれをあえてしなかったって事は今回のこのアメリカ強行武者修行&映画撮影をどうしてもしてこなきゃだめよっていう

海憂の言葉にならない声を俺がなんとなく感じていたからなんだろうと思う。

でも、ここに帰ってきた今、俺は迷わず彼女が居るであろう石吹に行ってみることに決めた。

明日、明日、石吹島に行ってみよう、おやっさんに会ってちゃんとお別れをしてこよう。

俺はすぐさま、石吹島へ行く準備を整えていた。

page 29 - 再会Ⅰ（前書き）

Ⅰ 海憂^{みゆう}第2章Ⅰ

石吹島の海は5年前とまったく変わらず、その海の青さをそこに湛^{たた}えていた。

俺は、海の家 潮騒までの道のりを歩いていた。

「こんにちは」

「はい」

「あら、拓斗くんじゃない？」女将さんが驚いた様子で俺のことを呼んだ。

「あなたの活躍見させてもらってるわよ、立派な俳優さんになったわね」女将さんは涙を浮かべていた。

「おやつさんに、会いにきました」

「そう、どうもありがとね・・・」女将さんが俺を家の中へと招き入れてくれた。

そこには満面の笑みをたたえたおやつさんの写真が飾ってある。

俺は線香に灯をともし、両手を合わせた。俺は、涙がこぼれそうになるのを必死でこらえていた。

「わざわざ遠くから来てくれてありがとうね・・・主人もきつと喜んでるわね・・・」女将さんが言った。

「拓斗、久しぶりだなあ」元気にやってたか？」聞き覚えのある声がした。康さんだった。

「康さん！ご無沙汰してしまつて、元気でしたか？」

「お、しかしお前も立派になったなあ」拓斗！まさか、お前が俳優になるなんて思つてもいなかったぞ」

俺はなんだか照れくさくなつて思わず苦笑いをしてしまった。

「なんか、お前もいろいろとあつて大変だったな」

「えゝまあ・・・」それからしばらくの間、女将さんや康さんとおやっさんのことや雅弥のことやらを話した。

女将さんも康さんも俺に気を使ってくれていたのだろう。2人とも海憂のことはいっさい口にしなかった。

「さて、そろそろおいとまします」

「そう、もう帰るのか？」

「泊まっていけばいいじゃない」

「ありがとうございます、でもちよつと俺、寄って行きたいところがあるんです」

「そ、じゃ、仕方がないわね、わざわざ来てくれてありがとうね、拓斗くん」

「拓斗、またいつでも遊びに来いよ!」

「はい、康さんも女将さんも元気で・・・それじゃ、また失礼します」

俺は海憂の家があつた方角へと歩き出していた。

海憂がそこにもしかしたらまだ住んでいるかもしれない。

海憂の思い出がそこにまだ残っているかもしれないとほのかな期待を胸に抱いて。

海憂の家へと向かう海岸沿いに、海憂と同じ年頃のような女の人と、まだ小さくてかわいい男の子が歩いていた。

ようやく歩き始めたばかりなのだろうか、よちよちと今にも転びそうになりながら歩いている。

俺がその親子連れの横を通り過ぎようとした時、その子供が転んだ。母親であるその女の人はその子の名前を呼びながら駆け寄って行く。「ウワン、ウワン」「海斗、海斗、そんなに泣かないの

ほら、チチンプイプイ、痛い痛いのとんでけゝ!もう治ったでし

よう？海斗」

海斗？どっかで聞いた事がある名前だな・・・

「ね、拓斗？」

「うん？」

「もしも、もしもあなたとわたしの間に子供が出来たら、名前、なんてつける？」

「えー、俺はまだ子供のことは考えてもいないなあ」

「まさか、出来たのか？海憂？」

「もしも、もしもの話よ・・・」

「そうか・・・」

「わたしはね、もし男の子が出来たらあなたの斗とわたしの海をたして海斗かいとってつけたいの、でね、女の子だったら

夏海なつみってつけたいんだ、夏の海で拓斗に出会ったから・・・単純かな？」

「いいんじゃないの、海憂らしくって」

「ばかにしてるんでしょ？」

「！！」俺は驚いた。まさか・・・。

そこにいた女の人はまぎれもなく海憂だった。

「海憂！！」「海憂！！」

「！？た、たと・・・！たととなの？」

「海憂！」

「拓斗！」

俺は無我夢中で海憂がいる方向へと走り出していた。

俺たちは吸い込まれるように抱き合った。俺は彼女をきつくきつく抱きしめた。

「みゆう・・・会いたかった、ずっとずっと会いたかった」

「わたしもだよ、わたしもずっとずっとあなたに会いたかった、夢

「夢じゃないよね・・・」

「夢なんかじゃないよ、海憂、俺はここにいる・・・」

しばらく海憂を抱きしめていた俺の視線の中に小さなかawaii男の子の視線が飛び込んできた。

「海憂？この子、もしかして・・・？」

「うん、拓斗、この子はこの子はわたしとあなたの間にできた子だよ」海憂が優しく微笑んだ。

「えっ？まじ？」

「うん、まじ・・・」

「海斗・・・」海斗は初めて見た俺のことを見て泣きそうになった。

「海斗、ほら、泣かないよ」この人はね、海斗のパパだよ」

「ぱ？ぱ」

「そうだよ、海斗」海憂が海斗を抱っこした。

俺は初めて見るわが子の顔を見て涙が浮かんできた。

「海憂・・・」

「うん？」

「あ、ありがと・・・」

「拓斗・・・」

「うん？」

「黙っててごめんね、あの時、あなたと別れようと決めた時、もうこの子はわたしのお腹のなかにいたの・・・」

「海憂、なんでなんでそんな大事なことを黙ってたんだ？」それから海憂は小さな海斗を抱いたまま

そうしてしまったいきさつを話しはじめた。

山根さんが海憂に別れろって言ったことや、どうして俺が海外なんかに行くことになってしまったのかとかを・・・。

山根さんは俺を海外口ケに行かせ、もっといい役者になれるよう修行をさせようと考えていたらしく

そのためには海憂を俺から引き離し、海憂のことを俺から忘れ去らせたくて半ば強引に海外まで俺を引っ張り出したんだと・・・

すべてのことをわかった上で海憂は考えに考えぬいて俺と別れる決心をしたんだと。

海憂はそのとき、海斗がお腹にいてくれたからどうにかやってこれた、この子を絶対、守っていくんだと

そういう気持ちが強かったからここまで生きてこれたと俺にそう話した。

海憂の家に着いた。そこは海憂を初めて抱いた8年前となんら変わってはいなかった。

しいていえば小さな子供がいかにも楽しげに遊んでいる、そんな優しい空間が広がっているそんな感じの家になっていた。

小さな洋服や、かわいいぬいぐるみ、ミルクの匂い。俺にとってはなにもかもが新鮮に映っていた。

海斗が寝静まったその夜に俺は海憂に2回目のプロポーズをした。

「海憂、今度こそ今度こそ、俺と結婚しよう、もう2度と2度とお前をどこにもやらない、離さない」

「やっとつかまえた俺の海憂・・・」「永遠にきみと一緒にいたい・・・」

「拓斗、ありがとう、もう2度と離さないでね、どこにも行かないでね、ずっとずっとわたしのこと捕まえててね・・・」

「あゝ約束する、海憂、もう2度とお前の手を離さないよ・・・」

俺は海憂の唇に自分の口を押し当て強く強くキスをした。

海憂の体は白かった。やっと手にいれた俺の海憂。

俺は今まで彼女と離れ離れになってしまった1年間の時を取り戻そうと無我夢中で彼女を何度も何度も抱いていた。

もう2度と離さない。海憂のことは俺が一生かけて守ってやる。俺たちはいつまでもいつまでも抱き合いそして愛し合った。

彼女のその細い手首には俺が彼女に初めてプレゼントしたターコイ

ズブルーのブレスレットが青く綺麗に光っていた。

page 30 - 幸せに・・・ - (前書き)

― 海憂^{みゆう}第2章 ―

海憂と再会してから半年後俺たちは結婚した。

結婚式は海の家 潮騒の仲間や雅弥、美咲ちゃん、愛実たちが盛大にやってくれた。

海憂は真っ白なウェディングドレスを着て長いベールをまとい真っ白なブーケを持ってとても嬉しそうな顔をしていた。

そのドレスは海憂の細いウエストを際出させていた。海憂、こんなに細かったのか・・・俺はそう感じていた。

「では、指輪の交換を・・・。」

俺は海憂の細い指に指輪をさして海憂は俺のごつい指に指輪をはめて・・・。

俺達は正真正銘の夫婦になったんだ。

海憂は瞳いっぱい涙をためてとても幸せそうな顔をした。

その様子をちいちゃな海斗が不思議そうに眺めていた。

海憂、幸せにするよ・・・俺はあらためて誓っていた。

「古坂拓斗さん、あなたは病めるときも健やかになるときも妻、帆苅海憂さんを守っていく事を誓いますか？」

「はい、誓います」

「帆苅海憂さん、あなたは病めるときも健やかなる時も夫、古坂拓斗さんを守っていく事を誓いますか？」

「はい、誓います」

「では、誓いのキスを・・・」

ちよつと遠回りをし過ぎたけれど、俺と海憂と2人の人生は今やつと始まったんだ。海斗という一番の宝物と一緒に・・・。

結婚式から数日後、俺は今まで俺を支えてきてくれたスタッフや山

根さん達に1通のファックスを流した。

その事でいろんな人や山根さんには思いっきり迷惑をかけてしまったけれど。

わたくし

私こと、古坂拓斗（26歳）は長年付き合ってきた帆苅海憂さん（31歳）とこのたび結婚式をあげたことをご報告致します。

わたくし

結婚をきっかけに私は兼ねてから考えていた海の家の経営者として石吹島に渡ることになりました。

この芸能界での仕事はここで引退という形を取る事にしました。

わたくし
こんにち

スタッフ及び私を今日まで支えてくれた多くのファンの皆様、今までほんとうにありがとうございました。

ほんとうに最後まで自分勝手な行動をしてしまったこと深くお詫び申し上げます。

古坂拓斗 海憂

古坂拓斗、海憂さん結婚へ！秘められた愛、2人の8年間の純愛物語

古坂拓斗、人気絶頂の今、突然の引退！その真相は？

「ほらー拓斗ーテレビでまたあなたのことやってるよ」海憂はニコニコ笑っている。

「もう俺には関係のないことだよ・・・俺は今、海憂と海斗とこゝで生きている・・・」

「後悔してないの？」

「まったく！！」きっぱり言った俺のその一言に

「また、強がり言ってる・・・ふふふ・・・」と海憂が笑った。

海憂が31歳 俺が26歳の時だった。

君がいる

僕は正しいの？それとも間違ってる？

もがきながら本当は過ごしていた

なのに　すべてを　君は抱いて

”どちらともあなたよ”と言ってくれた

小さな君が　僕の　大きな宇宙さ

ありがとう　ずるい僕も　愛してくれて

もう大丈夫だから

やっと 気づいたから

なんにもなかった 僕には

君がいる 君がいる

なにか つかもうと 駆け抜け さまよってた

傷つけたり 淋しくさせてたね

なのに 笑って 僕のために

” 思うように生きて ” と言って泣いた

うつむく君が 僕の 輝く未来さ ごめんね

夢や日々を いいわけにしてて

もう 大丈夫だから

やっと 二人きりだ

探し求めてた 場所には 君がいる 君がいる

だから 生きてゆく 一日一秒も長く

君に返してゆきたい 失った時間と笑顔を

小さな君が 僕の 大きな宇宙さ ありがとう

愛のすごさ 教えてくれて

もう 大丈夫だから ずっと 離さないよ

たどりついたとき心に 君がいる 君がいる

POP UP SMAP-iより)

(君がいる I

L a s t p a g e

―エピソード―（前書き）

―海憂^{みゆう}第2章―

Last page I エピローグI

海憂が31歳、俺が26歳の時、やっと2人で一緒に人生がやっていけると思っていました。

海斗と海憂と俺と3人との生活は幸せに満ち溢れていました。

彼女と再会する前に僕は海の家 潮騒に立ち寄りおやつさんに挨拶をしました。

すぐくお世話になった人だったから。

俺がそこを後にした時、女将さんが康さんに言ったそうです。

この店、拓斗君が継いでくれないかしら・・・って。

俺はその事を結婚式の日に関さんから伝えられました。

その頃、アメリカ口ケまでして撮った俺の映画は高く評価されていました。

でも、俺は彼女との結婚を決めた時から俳優の仕事は辞めようと思っていたから、なんの迷いもなくここ海の家 潮騒のオーナーを引き受ける事に決めました。彼女はもったいないなあゝってばやいてたけどね・・・

当然、収入は減ってしまうことになりましたが、それ以上に大事なものがあつたから、俺は後悔なんかまったくしていませんでした。

海憂が33歳になった頃、2人目の子供を授かりました。

でも、彼女は俺が若かった頃、俺の浅はかな行動のために、俺自身も彼女自身もマスコミに常にマークされ気の休まらなかった時期がありました。その時の彼女は相当な気苦労を感じていたと思います。たぶん、そのあたりから彼女は少しずつ体調を崩していたんだろうと思います。

そんな事を感じていた俺は彼女に、2人目はあきらめなかった言ってみてください。

俺は海憂を失うかもしれないという不安にかられていたから。

でも、彼女はどうしてもこの子を産みたい、拓斗とわたしの子供なんだよ、なんとしてもこの世に産んであげたい……。

そう言つて、頑として首をたてには振りませんでした。結局、根負けした俺は海憂の願いを受け入れました。

その時の海憂の笑った顔は向日葵のように明るく大きくみえました。どんなに俺が頑張っても母親には勝てないなあゝってそう思ったことを思い出します。

そして産まれた女の子が夏海^{なつみ}です。

小さな小さなその女の子は海憂によく似ていました。

でも、その頃から海憂は体がますます弱くなってしまい、それでも海斗と夏海を育てるのに一生懸命でした。

海斗が3歳、夏海が1歳の誕生日を迎える頃、彼女は亡くなりました。

「拓斗、この子たちを絶対守つてね、わたしの分も愛してあげて、たくさんたくさん愛してあげて……」

約束だよ……今までありがとうわたしは幸せだったよ……「そう言い残して……」

最後の彼女の顔は美しく、母親になって子供を育てられる喜び、幸せに満ち足りた顔をしていました。

俺は悲しくて寂しくて辛くて……海憂を失ってしまった現実を忘れたかったのを覚えています。

でも、そばではしゃいでいる海斗と夏海を見ると、こいつらをきちんと守っていかなきゃ、育てていかなきゃ……。

そう思いなおしたりしていました。それが海憂との最後の約束だったから……。

彼女との出会いから彼女が亡くなるまでの11年間はあつという間に過ぎていきました。

苦しい事のほうが多かったかな？なんて海憂はそう言って笑ってい

るかもしれませんが。

でも俺も彼女もその時を一生懸命生きていたんだろうと思います。彼女が亡くなってからもう1年以上経ちましたが、ときおり自分のそばで彼女の存在を感じる時があります。

彼女が優しく微笑んでいるような・・・そんな感じがな・・・。

生前、海憂がよく言っていました。もし、もしわたしが死んでしまふようなことがあったならわたしの骨は海に沈めてね・・・

わたしはそこにいつでもいるから・・・と。

俺は彼女がそう望むならと彼女の骨の一部をその海へと沈めました。彼女の月命日には2人の子供を海憂が眠るその海へと連れていきます。

海憂が子供たちの笑顔や元気な姿、成長していく様を見られるように思っています。

4歳になった海斗は海で泳ぐのが大好きでその姿はまるで海憂の生き写しのようです。

2歳になった夏海はおしゃまな女の子になって、俺が少し落ち込んでいたりするとパパ、しっかりしなさい！なんて

まるで海憂が話しているような口調で俺のことをしかりつけたりします。

この2人の子供たちが俺のそばに居てくれる限り、海憂も俺のそばで行き続けていてくれてんだろうと思うっています。

海憂へ

たくさんの愛情とたくさんの思い出をありがとう。

俺は君との過ごしたその日々を決して決して忘れる事はないと思う。

君が残してくれたこの子たちを俺は大事に大事に守っていきます。君の分までね・・・。

君のこと、守りあげるてやる事が出来なくなつてごめん・・・。

海憂・・・俺は君と知り合えて良かった。

君に愛されて君を愛して・・・愛して愛されて・・・

俺は俺はとっても幸せでした・・・。

海憂・・・

ほんとうにありがとう・・・

拓斗

Last page I エピローグI（後書き）

今回で海憂^{みゆう}はラストを迎えました。

初めて書いた小説？だったので読みづらかった点が多々あったと思いますが、ここまで読んで下さった皆さんありがとうございました。今回の作品にご意見ご感想があればどうぞコメントを残していただきたいとおもいます。

本当にありがとうございました。

RYO 103

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835c/>

－海憂（みゆう）－

2010年11月23日03時46分発行